



ゲイヴァ
リット
ジャーニー
Cavorite Journey





1 ケアヴァリットジャーニ

「わたしが本気で月に行きたがったことは、最初から
知ってたはずだ。いまさら止めようとしてもだめだ。
神様と悪魔が力を合わせたって、
わたしを止めることはできないぞ！」

——R・A・ハインライン「月を売った男」





▼
見渡す限りの荒野を、沈む夕陽の残滓が照らしていた。

グランドキャニオンを遙か西。横縞模様の岩山の間を縫うようにして、ビッターズプリングスへと続く国道89号線^{ハイウェイ89}。2車線のアスファルトの路面を脇目に太陽は彼方に沈み、紫と藍色に彩られた空にはぼつぼつと星が輝きを灯す。南の空に浮かぶ丸いお月さま。

フランク・シナトラの軽妙なフレーズを奏でるラジオは、レトロな装いのアンティーク品。広げたままのパラソルにくつきりと影を残す月光の下、チェアに寝そべったまま、傍らのドリンクに口を付ける。汗をかいたグラスからつうつと滴る雫が、北アメリカの乾いた荒野に吸い込まれては消えていった。

ひゅうと吹き付ける風が舞い上げる砂ぼこりにぺっと舌を出しつつ身を起こした。複合体に展開したディスプレイを確認。いくつかのグラフと観測値が規定内に収まっていることを確かめる。この作業も1時間と置かずが続けてもう3日、すっかり飽きて今は惰性に近い。

「異常ナシ……つつと」

定期報告のレポートを乗せてピンを打ち、もう一度チェアにごろんと横に。

世界を覆うネットワークのアドレスが枯渇し、電腦ネットが大都市圏を中心としたスフィ

3 ケイヴァリットジャーニ

アに移行して15年。いまだ全世界は拡張現実の恩恵を受けるには程遠く、こんな僻地の荒野では、リアルタイムの情報などほとんど文字と画像くらいしか送れない。観測機器の調整にも人の手を要し、VR完全制御なんて夢のまた夢だ。

ブラウザを弄って本日のニュースを確認。ウォーレン委員会の告示に伴う大統領臨時選挙の期限迫る。第十一次嫦娥計画いよいよ佳境に。来年に迫るエルサレム五輪開催に向け、新欧州連邦が声明を発表――

「……夜半から雨？ 参ったなあ。それまでに回収できればいいけど」

竜巻の進路予想まで並ぶ天気予報を眺め、ぼやきと共にドリンクを飲み干した。付属のスポーツ飲料の味は、砂埃と混じると特に最悪である。アメリカの合成食料の質は良くないという話はよく聞いていたけれど、まさかこれほどとは。逞しきかなフロンティアスピリッツ。スポンサーの意向とはいえ、せめて食べ物くらい日本から持ち込むんだった。

「Tマイナス0047、そろそろなんか見えてもいい頃なんだけどなあ」

ポケットから取り出した写真をじっと眺めて静かに吐息。身体を傾け、パラソルの下から空を見上げる。

西暦2039年3月11日、AM……現地時間に修正して、3月10日の午後7時55分。月と星から位置と時間を割り出す眼は、いつもと変わらず機能している。

チェアの脇では忙しげに天を指さすパラボラが軌道を修正し、反射波の行方を探っている。





レトロラジオに電源を供給しながら轟く、可搬型のサーバトランクが、液体窒素で虹色のデイスクを冷却していた。

「蓮子、晩ご飯できるよー。目玉焼きとスクランブルエッグ、どっちがいい？」

「私は和食派よ、メリー」

コンロの煙を立てるキャンピングカーの窓から暢気に顔を覗かせ、なんともものほほんとした話を振ってくる相棒に応える。

まだ見ぬ幻想を求めての渡米——いきなりの話に二つ返事で同行を了承した彼女だが、案外私よりもこのアメリカの荒野での日常を満喫しているようで、私は勝手に彼女に当てはめていた箱入りのお嬢様というイメージを修正せざるを得なかった。

いや、どっちかって言えばもともとメリーのほうが家事とかは得意だった気はするけど、ともかく。

「どんな感じなの？」

「どうもこうも、さっぱりね。なんの兆候もないみたい」

「機械が壊れてるんじゃないかしら？」

「そんなことはないはずよ」

確かにこんな専門機材、扱うのは初めてで原理はマニュアルに目を通したくらいだけど、使い方に関してはみっちり講習を受けたのだ。ディスプレイに浮かぶ各地数値は間違いない



正常値。一切の乱れなく世界が平穩であることを示している。

「メリーはどうなの？」

「んー、私？」

ひょいとフライパンの上に砂糖たっぷりの合成卵をひっくり返して——パンケーキじやないんだから——メリーはそれを器用に受け止め、

「今のところ、それらしいものは視えないわね」

とまあ、なんともあつさりしたもの。せっかく借り出した機器を信用していないという訳ではないけれど、こと異変、異常に関して私は相棒の目以上に信用できるものを知らない。

予定時刻は今日この日、西暦2039年の——現地時間3月10日の午後8時32分15秒。すでにリミットまでは30分を切っている。多少のずれがあることを考慮すれば、そろそろ何かの予兆が見えたっておかしくないはずだ。

「まあ、おゆはんの時間を邪魔されないのはいいいことかただけど——」

ぼやいた私が、食卓に着こうとしたその時だ。

不意に、ディスプレイの片隅で波形が急激な変化を見せた。磁場、電磁波、サイオン想子収束、立

て続けに各種のセンサーが異常を訴えるメッセージを発する。ディスプレイを埋め尽くす警告ウィンドウに、私は跳ね起きるなり飛びつくように画面に顔を押し付けた。

「——来たっ!!」





磁場の乱れと反転上昇、電磁波の断続的な遮断と増大、自然界には存在しない放射性元素の特異的な放出。いずれも結界の活性化時に観測される諸現象に極めて酷似している。

なによりも明瞭なのは、

「蓮子！」

「メリー、視えたの!？」

問う私に、相棒ははっきりと頷いてみせる。モニタの各点から示す座標は、予定位置より北東に0・7キロほどずれていた。観測位置の影響か、あるいは私の眼の精度の問題か——いずれにせよ、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

「出発よ、メリー!! 乗って!!」

「え、待って、ちよつと蓮子!? 片付けは!？」

「そんなの後! 出遅れたらどうなるか分からないもの!!」

展開していたテーブルをまとめて後部キャビンに放り込み、機材をまとめて屋根の上へ。エプロン姿のメリーを無理やり助手席に押し込んで、運転席に飛び乗る。無駄にワイルドカスタムされたキャンピングカーのエンジンキイを捻り込み、クラッチと共にアクセルを踏み込んだ。砂煙をあげてターンさせた車体を、一路荒野の彼方へ。

マッドマックス

前時代的な化石燃料のエンジンが唸りをあげる。気分はまさに怒れる最高潮。趣味で取得していた国際免許ではあるが、こういう文明と途絶された荒野においてはやはり物を言うの



は馬力とトルクである。

「あ、安全運転でお願いね!？」

「保証はしかねるわね!!」

助手席で抗議を訴えるメリーだが、激しく上下に揺れ動く視界の中ですぐに大人しくなった。舌でも噛んだのかもしれない。

口元を押さえて呻くメリーの、涙に滲む瞳が、虹色に輝いて光彩を波打たせ、「それ」の出現をはっきりと知らせてくれる。

運転席横に展開した複合体の簡易モニタで、異常を告げるグラフの稜線は天井知らずに伸び続けていた。平常時の一万倍を超えてなお上昇を続けている。もはや疑うべくもない。科学世紀の結界技術と、メリーの目、二つがはつきりと境界の異常を示している。

サンバイザーに留めた一枚の写真。移り込んだ岩山の背景と、僅かにのぞく月と星。

夜空に映るその二つから、私の眼が弾き出したこの日、この時、この場所に。予言されていた通りの異変が到来したのだ。

「間違いないわ! 本当だった! あれは本物なのよ……!!」

新たな境界平面が出現するということに、疑いの余地はない。

荒れた岩地を八輪駆動のキャンピングカーが乗り越えて、激しい上下動にハンドルを握みながら、砂煙を立てて只管に走る。やがて向かいの岩山を大きく迂回して車体を巡らせた時、





「見て、蓮子！」

行く手を指さしメリーが大きく目を見開き叫ぶ。異境を見る術を持たない私にも、そこに異常なものがあることは理解できた。

赤茶けたアメリカの大地のど真ん中に、真っ白に染まった大地がある。

わずかな風に触れればすぐに溶け崩れそうな、細かな砂と岩に覆われ、いくつものクレ―ターが穿たれたそこは、まるで――

「月、？」

一面の白い光景は、資料映像やスフィアネットで見ることのできる、人跡未踏の月の大地に酷似していた。

がくん、とキャンピングカーが速度を緩める。知らずアクセルを離した車体が、惰性でゆつくりとその領域の内側に踏み込んでいく。

メリーが息を呑む音がすぐ耳元で聞こえた。彼女には見えているんだろう、ここがどんな場所であるか。私達が畏れ懂れる、あの境界の「向こう側」であることが。

タイヤが砂地にはまり、ぐおんと空転をはじめた。アクセルを思い切り踏んでみても、滑る液体の中に突っ込んでしまったように思うように進まない。

「蓮子、どうしたの？」

「……こりゃあ、いよいよ本物よ、メリー」



じつとりと吹き出した汗が顎を伝う。異常事態を知らせる複合体のアラームの中、重力波を示すグラフが描く曲線を見て私は戦慄した。

この領域では、重力さえ6分の1だ！

「窓は開けないでおいで。酸素もないかもしれない」

「……そうね。見て、あれ」

「わーお……」

硬い声でメリーが窓の外を指差した。運転席から見上げた空には、さっきまで見えた月の代わりに、青く輝く地球が浮かんでいる。

戦慄に背筋が震え、そして同時に高揚が激しく胸を打つ。

ああ、間違いない。私には分かる。この眼があるからこそ分かってしまう。

ここは月だ。

38万4000キロの彼方に浮かぶ、地球に最も近い天体。歴史の果てに人類が焦がれ、偉大な一步を刻まんと挑み続けたその一区画が、このアメリカの大地に出現している。

「これが——例の『宿題』ってやつなのかしら」

乾いた喉に唾を飲み込んで、周囲に視線を巡らせた。広さはざっと300メートル四方。レゴリスに汚れたフロントウインドウを、ワイパーで拭う。かちり。



複合体にセットしていたアラームが激しく鳴り響く。胸元で震える端末を撫でてサスペンドさせ、天を仰ぐように吐息。

「午前12時——もとい、現地時間、午後8時32分17秒。誤差含めて想定ジャストね。これはいいよ本物かな」

正確には、現地月時間との時差スケールの修正が必要かもしれない。

……いや、しかし、何が起こるかまでは未知の領域だったわけだけど。

まさか、目の前に月がやってくるなんて思いもしなかった。

「……どうするの？」

「様子、見てくる」

「ちよつと、蓮子!？」

いま酸素ないかもしれないって言ったじゃない!? と背後で激しい抗議を聞き流し（外部の音が聞こえる時点で空気はあるはずだ）、私は運転席を飛び降りる。

場所は分かっていた。一面の白い大地が、月が私にそれを教えてくれている。びゅうと吹き付ける月の砂に顔を覆いながら、真っ直ぐにそこへ。

携帯端末が、PANに接触した端末を検知する。こんな荒野の真ただ中、ワイヤレス通信を備えているのは私達の乗るバンとその周辺機器のほかには存在しない。

ゲストログインを求めるコールと共に、飛んでくるのは挨拶の声。

『Hi!』

間違いない。アクセスは眼の前からだ。

太陽電池パネルを左右に広げ、白い砂に轍の後を引いて奔る、小型の四輪車。

識別名は「**月球車玉兎**」。嫦娥三号の月面探査車、玉兎号だ。もう20年以上も前に動作を

停止し、以後の消息が分からなくなっていたはずなのに！

「蓮子！」

おっかなびつくり、6分の1の重力の中を駆け寄ってくるメリーも目を丸くしている。

驚くべき手段で、20年ぶりに地上へと帰還した月面車を前に。

私達はこの、数奇な旅のはじまりを思い返していた。





暦の上でも燕は南に帰り、そろそろ暑さもしのぎやすくなるこの季節。講義をサボって静かにそよぐ風を堪能しながら、薄く汗をかけたグラスにからんと氷が揺れるのを眺めるのも、私の中ではひとつの風物詩。

「夢を見たのよ」

いつもの通り学内のレトロ・カフェテリアに向かい合わせに座って、ホーキングフレーバーのミルクティーを前に、メリーはそう切り出した。

私の友人であるマエリベリー・ハーン——通称メリーが、夢の中で『ここではないどこか』を訪れているのは、二人の間ではすでに公知の事実。物事の結界のほつれを見つけたという彼女の異能の目が、夢の中ではより幻想的に働いているのではないかと私は推測しているのだが、真実は定かではない。

「またいつもの神社？」

「そうじゃないのよ。だからちよっと気になって」

夢の中でのメリーの冒険の記録はすでにノート数冊分に及んでいて、秘封倶楽部の重要な活動のひとつだった。聞き手としてではあるものの、私もその冒険を楽しみにしている。



「なるほど。それでわざわざ講義抜け出してまで会いに来てくれたわけね」

「……もう。蓮子だって人のこと言えないじゃないの」

小さく膨れてみせるメリー。まあなんというか最近はこの顔が見たくてサークルしてるんじゃないかなあ、と思うときがあったりなかったり。

……閑話休題。

メリーが夢の中を赴く先は、鬼が跋扈する地獄やら蒸気と煤に満ちた都市やら、果ては宇宙の彼方の人工衛星やらと千変万化に富んでいたが、統計を取ればその多くが幻想郷と呼ばれる場所に集中していた。けれど昨夜メリーが見た夢は、それまでに覚えのない場所であつたらしい。

夢の舞台は、深夜の古びた廃線の駅。

見渡す限り一面のスキに囲まれ、錆びた線路に朽ちた駅舎。空っぽの時刻表。時代から取り残された廃墟のような単線の駅で、メリーは行き先の書いていない切符を手にベンチに腰掛け、来るはずのない列車を待っていたのだという。

「へえ……確かにちよっと幻想郷っぽくないわね」

「わからないわ。場所がいつもの雰囲気じゃなかったって言うだけで、出てきたのは立って歩いて喋るウサギだもの。十分に幻想的よ」

そう言うと、メリーは頭の上に広げた手のひらをちよこんと乗せる。ウサギ耳のつもりな





のだろう。

駅に廃線路なんて、確かにこれまでの夢には見られない要素だ。手帳を開いてメリーの気分をそがない程度にメモをとりつつ、先を促す。

「なるほど。そのウサギさんと一緒にお餅つきでもしたのかしら？」

「いいえ。その子、ちよつと変わった格好をしてて……なんていうのかしら、制服みたいな服だったわ。それで懷中時計をこう、首から掛けてて……」

「ルイス・キャロルのほうなのね」

暗黒物質のように黒い髪、ダークマター石榴石みたいに赤い眼をして、頭に白くて特徴的な耳をくつ付けて。彼女(?)は最初、メリーの姿を見てとても驚いていたらしい。

「どうしてここに、とか。通信が傍受されたのか、とか。あんまりお呼ばれしてる感じじゃなかったかしらね」

「歓迎されてることの方が珍しい気がするわ、メリーの場合」

「失礼ねえ、ちゃんと見つかったらお詫びしてからご挨拶してるのに」

不法侵入には変わりない気もする。ともあれ、懷中時計とメリーの顔を何度も見比べてから、彼女は錆びついた時刻表の向かいに座り、話しをはじめた。

自分が月生まれのウサギであり、ある事情から地上に降りてきて、もうずっと長い間、人の目を逃れて暮らしていること。はぐれた仲間を探していること。

「その子はね、月から来た秘密工作部隊の生き残りだって言うのよ。ずっと昔に起きた地上と月の戦争の時に、秘密作戦で地上に降りて来たんだって」

「……ふむ。戦争ねえ」

どうも、あまり穏やかではない話のようだ。

月には地上の穢れを厭う者たちが住みつき、人間たちの目に触れない場所に都市を築いているのだという。彼女もまたそんな月の住人の一員であり、アポロ戦役と呼ばれる戦乱の中で、月を侵さんとする地上の人間達と戦ったのだそう。

「アポロ戦役……?」

「ええ。そう言ってたわ。アポロって人が最初に月に行った時の話よね? 戦争ってこととは違うように思うけど、そういうもののなの?」

「そうね。人類初の月への有人宇宙飛行計画。もう80年も前の話だけど」

さてどう説明したものか、と私はメモをとっていた手帳に視線を落とした。次のページをめくりながら記憶を巡らせる。

「すごく乱暴に言えば、宇宙開発の歴史って星を標的にしたロケットの射的競争よ。どっちが早く、どっちが先に人類を月に送り込むか。少なくとも単純に、科学的見地と知的興味だけに基づいたプロジェクトじゃなかったのは確かだと思うわ。」

イデオロギー対立とか、政治的な思惑とか、そのへんの話をし出すとキリがないけど……





たくさんの方が威信をかけて、月到達のために邁進してた時代だったの」

人類が、夢や絵空事ではなく本気で月を目指しはじめたのは20世紀の半ば。東西に分かれていた世界陣営のうちの片方が、地球を周回する世界初の人工衛星を打ち上げてからだ。

それまでお互いに向け合っていたミサイルを、ロケットと名前を変えて空に向け。その標的に選ばれたのが、38万4000キロの彼方にある月だった。

栄光と開拓の宇宙開発黎明期。1960年の初頭に、第35代アメリカ大統領ジョン・F・ケネディは、これから10年間のうちに人類を月に送り込むと宣言した。

「世界の目から見れば、宇宙での一番乗りはすべてにおいて一番ということだ。

宇宙での二番乗りは、何事においても二番手ということなのだ。」

当時、宇宙開発を積極的に推進したある政治家の演説の中にこのような一節がある。その頃の世相を実によく表現した言葉だろう。莫大な広告費と研究開発には国家予算の多くが費やされ、人類は熱狂の中に身を委ね、狂奔に駆られたように月を目指した。

「アポロの他にも、月を目指して行われた計画は山ほどあったわ。失敗したもの、他の計画の下支えになったものの、計画だけで実施されなかったもの、そもそも実現不可能だったもの、大小含めればそれこそ星の数ほどね」

「——そうなんだ。本当に戦争だったのね」

空になったミルクティーのカップをテーブルに戻して、メリーは頷いた。

「で、夢の話だけだ」

「ええ。その子たちは、地上の侵略から月の幻想を守るために戦ったんだって言っていたわ」

「侵略かあ……」

人類として初めて月に降り立ち、偉大で小さな一步を刻んだ宇宙飛行士たちは、月面に彼らの国の旗を立てた。月の住人達にしてみれば、それは確かに、地上から月への領有宣言に見えたのかもしれない。

「実際、本気で月に一番乗りで着陸した国がそこを征服できると思ってた人も少なくはなかったらしいわね。月に向けて打ち上げるロケットの名前に、太陽神アポロの名前を付けたりするんだもの。侵略の意図がまるつきりなかったとは思えないわ」

月に旗を立てた人類に、月に住む者たちは恐怖し、驚愕したそうさ。

幻想の住人達にとっての月は、人間にとっての太陽のようなものであるらしい。神話や伝承に語られる幻想の聖地へ、侵略ミの旗キを掲げて踏み込んだ地上の人間達に、月の住人達は徹底抗戦を決意した。

月の都では本土決戦に向けた準備が進められる一方で、月のウサギたちの中から精鋭が選抜され、特殊な訓練を受けて妨害工作のため地上へと派遣されることになった。





地上降下秘密工作部隊『ジャツカロープ』彼女達は決死隊として人間たちの月着陸船にこつそりと潜り込み、密かに地上にやってきたのだそう。

「その子達もきつと驚いたわよね。地上の代理戦争を月でやってるようなものだもん」
「……そうね」

完全なとぼちちりで自分たちの故郷がロケットの標的にされ、挙句には無惨に踏み荒らされていたという事実を、彼女達はどう思ったのだろう。

いずれにしても、月のウサギたちは諦めなかった。

月を侵略していた地上の国々が一枚岩でなかったことを知った彼女達は、そこに付け込んでそれぞれの陣営の対立をあおり、仲たがいをさせ、秘密工作に暗躍した。有名なアポロ13号の事故をはじめとして、月探査計画にまつわるトラブルのうちの何割かは、彼女達月のウサギの工作員が起こしたものだそう。

……けれどそんな妨害ものともせず、次々とロケットは打ち上げられた。その頃の月到達計画は、すでに人類の悲願と位置づけられていたから。

人類の侵攻は圧倒的だったという。

偵察のため次々と飛来する観測衛星、一年と開けずに降下する着陸船、月の砂漠を疾走する月面車。人類の『科学の進歩』が踏み荒らした月からは幻想が失われ、月の住人達はほとんど月の裏側に追いやられていった……らしい。



月を目指す宇宙開発は、国と国との代理戦争であっただけでなく、科学と幻想の戦争でもあったのかもしれない。

「だからアポロ戦役か。……確かに、怖がられても嫌われても仕方ないのかしらね。夢に出てきて文句の一つも言いたくなるか」

なんとも微妙な気分のため息をつく私に、メリーは小さく首を振る。

「そうじゃないのよ蓮子。その子たちが本当に恐れたのは、もっと別のことなの」

「別のって、どういうこと？」

「……その子たちは、月がなくなってしまうと思ったらしいの」

意味が分からず、メリーの言葉に瞬きする私。

「月が？」

「人間が、月を残らず地上に持ち帰ってしまうんじゃないかって、恐れていたのよ」

長い耳を夜空に向けて精一杯伸ばし、赤い眼を涙に濡らし、空に輝く月を見上げて。夢の中で、月のウサギはメリーにそう語った。

月を、我が物に。

月の住人たちは、地上の人間達が比喩抜きでそうしようとしているのではないかと危惧していたらしい。

アポロが地上に持ち帰った月の石は、6回の着陸で総計およそ400キログラム弱。他に





も各国が無人探査船を含む月探査計画を実行し、月の砂を持ち帰ることに成功している。

月面車を走らせ、研究のために地面を削り岩を砕いて持ち帰るその姿を見て、月のウサギたちは震え上がった。傲慢で強欲な地上人たちは、やがて何十、何百基というロケットで大編隊を組んでやってきて、月を粉々に砕いて地上に持ち帰ってしまうのだろうと。

「……それは、なんとも壮大ね。ジャイアントインパクト以来の大事業じゃない」

38万4000キロを隔てた四十億年越しの懐旧。

年毎に3・8センチ遠ざかる月までの距離を、地上人は必死に繋ぎ留めんと焦がれているのだ――。

……うん。その発想は、どうしようもなく幻想的だ。

「ねえ蓮子。アポロ計画ってたしか途中で終わってるのよね。いつ中止になったの？」

「公式には1972年12月。アポロ17号が月から帰ってきたのが最後ね。結局、アポロ計画の着陸船が月に到達したのは、13号の失敗を除いて都合6回、月を歩いた人類は12人だけ。当初の計画だと20号まであったんだけど、3回分が短縮されたの」

アームストロングの偉大なる一步は人類史に深く刻まれ、全世界の人々から熱狂をもつて迎えられたが、その後アポロは急速に人々の関心を失っていった。一度辿り着いたゴールへ莫大な予算を費やし何度もロケットを送り込むことへ多くの反論が湧き起こり、人類の宇宙開発は新たな方向へと舵を切る。



「なら、あの子たちの努力は無駄じゃなかったのね」

「どうかなあ……確かに月の有人探査は中止になりはしたけど、その後も宇宙開発自体が凍結されてたわけじゃないのよねえ」

結局のところ、月着陸は徹頭徹尾、人類の一方的な都合で始まり終わったことになる。それで果たして、月のウサギたちの妨害活動は実を結んだといえるのだろうか。

いずれにせよ。それと前後して世界構造の変動と共に、遙か遠方を目的地とする宇宙開発は大きく減退し、以後半世紀にわたって、月は再び未踏の地となる。

「大山鳴動して鼠一匹……にしちゃちよっと大きすぎるけど、月のウサギにしてみたらいい迷惑だったのかもね」

いつの間にか氷のなくなっていたアイスコーヒーを、一息に啜る。空になったグラスをテーブルの脇に追いやって、私はメリーに先を促した。

「で、結局その月のウサギさんはなんでメリーの夢の中に出てきたわけ？ 歴史の補講でもしに来てくれたのかしら」

「違うわよ。だったら蓮子のほうに行って貰うようお願いしてるもの」

「……そんな魅力なお話なら歓迎したいけどね」

思わず苦笑。

いやまあ、物理屋にとって興味のあるところ以外の歴史年表などはあまり意味がない……





というのが個人的な心情ではあるけれど。

「その子ね、お友達を探してると言っていたの。同じように月から地上にやってきて、離れ離れになった仲間たちに、一目でもいいから逢いたいって」

「……そっか。寂しいと死んじゃうのは月のウサギさんもおんなじか」

「そうね、蓮子みたい」

「一緒にしないでっば！」

まったくの不意打ちで微笑みかけられ、グラスを抱えてむせる私。さらにメリーの笑いを誘う羽目になった。

ばつの悪さに帽子を引き下げ、メリーから視線を遮って空っぽのストローをくわえる。

「そうじゃないのよ蓮子。もっと、……切実だったの」

帽子で塞がれた真つ暗な視界の向こうから、硬い、メリーの声音が響く。

「月のウサギはね、確かには月に住んではいるけど、普通の方法では私達の住んでる地上には降りられないそうなの。幻想で繋がれた場所同士なら、月の——羽衣っていうのかしら？　そういう宝物を使って行き来ができるそうなんだけど、そこに私達はいないでしょう？」

だから、ロケットを飛ばす地上人のもとにやってくるには、同じようにロケットに乗ってやってくるしかなかったそうよ。……でも、それからずっと、人類は月に人を乗せたロケットを飛ばさなかったから」



「ああ——」

そうか。

単純な、ことだ。

彼女達は、『決死隊』として、地上にやってきた。それは要するに、もう故郷の月に戻ってこれないことを意味していたのだ。

「その子たちが地上に降りてからもう何十年も経っていてね、同じ部隊の仲間たちとも離れ離れになっちゃったそうなの。ずっと通信に呼びかけてるのに連絡も取れないんだって。

探してるその仲間の子ども、とっても寂しがりで、怖がりのウサギだったらしいわ。私と話したウサギさんはその子と一緒に地上に降りるはずだったんだけど、その子は作戦の前に逃げ出しちゃったらしいの。それ以来、ずっと行方不明だそうよ」

「……………」

「きっとその子は、今もその事で自分を責めてるだろうから、気にしないでいいって言ってあげたいって。……月に帰れなくてもいいから、せめてもう一度会って話がしたいんだって、そう言っていたわ」

ふいに、頭をよぎる光景があった。

遙か離れた青い星。故郷の六倍の重力に引かれて自由に空に飛び上がることもできず、耳を精一杯そばだてて、ノイズだらけの通信の中に、月から響く仲間の声を探し。





38万キロの距離を隔てた故郷を見上げ、目を真つ赤に泣き腫らして。ただひたすらに懸命に、何度も何度も繰り返し、地上に取り残された月のウサギたちは、遥かな故郷を目指して跳ねる。

逢いたい、逢いたい、帰りたい。

最後は泣きじゃくり、メリーの前でただそう訴え続ける彼女の涙を最後に――

「……そこで、目が覚めたの」

「なるほど、ね」

なんとなくかき上げた前髪をくしゃくしゃといじり、吐息。

中途のままのメモを放って、私は手帳を閉じた。メリーの夢はいろいろと興味深いのでこうして記録を取っているが、今日の話はやはりいつもの夢とは毛色が違う。

「なんていうか、重いわね」

「ええ……」

わざわざ講義まですっぽかして、メリーが私を呼び出した理由も、きっとこれだ。

自分たちの故郷を守るために、地上に取り残された月のウサギ。その声にメリーが呼ばれたのは、人類へのせめてもの抗議と、涙を堪えて助けを請うためだったのかもしれない。



「……ありがとう蓮子。聞いてくれて」

「ん、そんな、お礼言われることじゃないわよ。聞かせてくれて言ってるの私の方だしさ」

メリーの表情が少し和らいだので、私も安堵しつつ小さく深呼吸。

「月のウサギかあ……」

メリーが夢の中で喋るウサギと出会うのはこれが初めてではない。確か前にも、迷路のような竹林で、同じように白兎と追いかけたり追いかけられたりしたことがあったはずだ。

「ひょっとして、その時の関係なのかもね」

「そうね。……もう少し詳しいことが分ければ、教えてあげられたのかもしれないわ」

カップの端を弄びながら、メリー。相棒は随分気落ちしているようだった。

「ねえ蓮子。それじゃあの子たちのしたことって、やっぱり無駄だったのかしら」

「……………」

アポロ計画が終了し、月面の開発こそ一度は途切れたものの、天の星々を観測する活動は地道に続いていた。

そして今世紀になってようやく、中国主導の嫦娥計画によって、人類は半世紀ぶりに再び月の地を踏んだのである。以来、月面基地の開発が着手され、地上と月は定期的にロケットで結ばれている。現在では民間の宇宙旅行も（ごく限られた層にしか手の届かないものだけに）実現しており、もはや月は未踏の場所ではない。





彼女達が必死に守ろうとした月の幻想は、泡沫のように失われてしまったのだろうか。

「……私はそうは思わないわ」

なにかの根拠があるわけでもないのに、私には不思議と確信があった。
ゆつくりと首を振り、私は自分の眼を指差す。

「だってメリー、私達には常識でしょ？」

「え？」

星を見て現在の時刻が、月を見て現在の位置がわかる私の眼。

それは、月なくして存在しえない異能だ。

「月の幻想って、そんなにヤワじやなかったんじゃないかしら。月のウサギたちの努力をひ
つくるめて、ね」

”——地球は青かった。見回してみても神はいない。”

世界で初めて重力の支配を脱して、宇宙を飛んだ宇宙飛行士はそんな言葉を残したとも言
われているけれど。

21世紀初頭からの月探査計画の再燃によって、月の裏側に天使の落書きがない、という
ことまでをも暴かれてなお、月は多くの人を魅了した。



「事実、宇宙飛行士の中には結構な割合で、メリーみたいに夢見がちになっちゃった人もいるみたいなのよ。」

当時の人たちにしてみれば、宇宙を飛ぶなんてすごいことだし、月に立って青い地球を見上げるのは天地がひっくり返るようなことだったのかもね」

「……もう、わたしは別にそんなんじゃないわよ」

ちよつと膨れるメリー。またまた御冗談を。彼女が違うとおっしゃるならば、人類の大半が夢を失ってしまうだろう。

「宇宙飛行士なんて、科学の最先端の極致みたいな職業よ？ オカルトとは一番縁の遠い人のはずなのに、公式の通信記録にも結構残ってるのよ、胡散臭い報告が。宇宙人と会ったとか、UFOを見たとかそういうのならまあ分からなくもないんだけどね。全世界中継されている通信でサンタクロースを見たって報告をしたり、超能力の開発をする財団を作っちゃったり、地球に戻ってからノアの箱舟を探しに行っちゃったりした人までいるのよね」

古来、月は人を狂わせるとも言う。21世紀まで残り続けた月狂^{ルナティック}条例なんて言葉を引き合いに出すまでもなく、その幻想はいつも私達の頭上に輝いていた。

ならば。人類史ではじめて月に近づいた12人の中には、その魔力にあてられてしまった人も少なくないのかもしれない。

「そのせいかどうか分らないけど、前世紀のおしまいには人類が月に立ったことを本気で





信じていない人たちもいたみたいね」

「そうなの？」

「ええ。アポロが月に着いてから何十年も経つのに、誰も月に行こうとしなかったから。人類の月到達は捏造だ、陰謀だって説があったみたい。著名な学者の中にも、結構本気で支持してる人がいたそうよ。」

……ひよっとしたら、それも月を幻想のものにしておきたいっていう、月のウサギのささやかな抵抗運動だったのかも」

そういう意味では、月の地を踏んだ12人は、まさしく幻想となってしまったのだ。偉大なる一步を踏んだ最初の月面歩行者アームストロングからして、NASAを退職して後はまるで隠者のように公的な活動から退いてしまう。

月は妖怪、魔の象徴でもある。

私の眼のような力が、いまだに生き残っていることを考え合わせれば、人間の月侵略は阻止されたのだといってもいいのかも知れない。

「メリー、なんだったなら見に行ってみましょうか」

「なにを？」

「月を、よ。うちの大学にもあるらしいじゃない、アポロが持ってきた月の砂^{レゴリス}。あなたの眼で境界が見えるかもしれないわ」



「もう、蓮子ったら……それで今夜、また故郷を返して、なんて泣きつかれたらどうするの？」
呆れ顔でそう言いながらも、メリーも満更ではなさそうだった。

「よし、決まり。今日の秘封倶楽部の活動は、38万キロの彼方、月世界の境界探索よ！」
帽子をかぶり直し、椅子を引いて席を立つ私に、メリーも立ち上がる。

ふと見上げた秋の空には、右半分の欠けた白い月が浮かんでいた。





▼
研究室の机に、見慣れない封筒があるのを見つけたのは午後になってからだった。

前世紀をはるか過去にして、一度は猫も杓子も電子化で目の目を見なくなった紙媒体通信ではあるが、神亀の遷都はそれを再び変貌させた。京都を包む式群結界技術の革新と共に、今日では紙媒体の再評価が行われている。

かつては迷信とされていた通信への呪詛汚染。一滴で世界を覆い尽くす悪蛇の毒。新たな脅威の前に、ネットスフィアに遍在しない紙の情報はその『質』の高さを評価され、一部の重要書類などは再び紙媒体へと逆戻りしていた。

それでも、手紙という文化はいまや本来の姿を失って久しい——のだから。

「——残念ながらラブレターってわけじゃなさそうね」

色気も素気もない薄緑の封筒に呟きつつ裏返せば、そこには赤い封蝋が施されていた。古めかしい印章まで捺された本格的な封印である。

差出人の名を見れば、見慣れない文字の羅列があつた。

「……第六大陸開拓公社」
Sixth Continent Cultivate Public Corporation

S.C.C.P.C.なる略称の下には、国外の住所と消印が並んでおり、この手紙が海を越えてき



たものであることが窺える。

「これ……？」

「なんだ、宇佐見、戻ってたのか」

封筒を矯めつ眇めつしている、机の向こうから声。同じ所属の朝倉先輩である。彼女はジェンガを積み上げたような機器の山の麓に蹲りながら、ひらひらと白衣の手を振って、

「さつき来客があつたぞ」

「どなたです？」

「知らん。黒服の二人組だ。留守だつて言ったら帰つてった」

用件は伝えたとばかり作業に戻る先輩。せめてどこの誰かは聞いといて欲しかったなあと思ふまで出かかるが、思いとどまつた。迂闊な事を言うと言伝いを押し付けられ、そのまま徹夜コース確定である。

「なんにせよ、あまり得体の知れない連中と付き合うなよ。こつちも面倒見きれんぞ」

「はいはい、分かつてますつて」

席に着いて改めて手紙に目を落とす。心当たりのない名前ではあつたが、ダイレクトメールの類にも思えない。未知への興味と期待八割で封筒を破り、中身を取り出す。

防水紙の中に納まっていたのは、才媛を妬む不幸の手紙とカミソリ数枚——というわけではもちろんなく、ぶ厚い書面と、国外行きの航空機の手紙が二枚。



「こりゃ本格的ね」

正直、誰かの悪戯かと疑っていたのだが、どうもそんな気配ではないらしい。少し真剣に意識を切り替え、書面に目を落とす。

まず、冒頭に正式な書類であることを示す公社の刻印と認証。続いて記された文面はこれが開発公社の名前で起こされた法的手続きに基づく文書であることを宣言していた。

「……ふむ」

なにやら不穏な気配を感じつつ文字をなぞっていくと、愛想も素っ気ない機械的な挨拶を挟み、さつさと本題が始まった。

その内容は、私こと宇佐見蓮子（以下甲とする）と開発公社（以下乙とする）の間で所有する資産（以下略）の譲渡契約締結を前提に、正式に交渉のテーブルに着くことを要求しているものであった。

同封の航空機の手ケットは、どうやら私とその弁護士との渡航費用ということらしい。

さらにこの書類は司法手続きに含められた書類であり、私に応答の意思がなければ強制的な執行も辞さないという一文が付け足されている。つまりは――

「差し押さえ？」

思わず口に出してしまい、私は慌てて周りを見回した。

幸いなことに研究室の面々は皆、自分たちの作業に掛かりきりであり、こちらに注意を払

っている者はいないようだった。論文から視線を上げた先輩に小さく頭を下げて、私は椅子の上に腰を下ろす。

「……………」

眉間に皺を寄せつつ、読み間違いかと二度三度文面を追いつ直すが、どう読んでもそうしか取れなかった。念のため複合体を展開して翻訳辞書まで通してみても、さすが法的文書、誤読のしようもないくらいに内容はシンプルで、異議を挟む余地はない。

ということは、これが偽物か盛大な勘違いか、誰かのドッキリでも無ければ、私は誰かに訴えられようとしているというわけだ。

「むう……」

閉じた口をへの字では済まない気分捻じ曲げつつ、二枚目の書面へ。

こちらには私の保有しているという資産がリストになっていた。英文の馴染まない地番がずらずらと並んでいる。どうやら、私の資産とやらは土地であるらしい。

読んでゆくと、そのほとんどが同じ地域に纏まっている。

…

21. Aitken basin / 53.1° S 169.5° W 234DE-43

22. Aitken basin / 53.1° S 169.5° W 234FE-47





23. Aitken basin / 53.1° S 169.5° W 235EE-48

24. Aitken basin / 53.1° S 169.5° W 236EF-37

...

どれも見覚えのない地名だった。記載内容からして国内ではないようだが、そろそろと並ぶ地番はひと続きであり、購入の時期もばらばら。ただ、付属していた地図によると隣接する区画を示しているらしいことが把握できた。

書面によれば、私はこれらの土地を長年に渡って不法に占拠しており、公社の開発事業に著しい影響を与えているのだという。交渉に応じない場合は法的措置、強制執行も辞さない、威圧的な文章が並んでいる。

「ひどい話ねえ」

無論ながら、心当たりはまったくない。

「開発公社って言うくらいだから、未開発地域なのかしらね。……にしてもすごい量ねこれ」
京都にそんな場所が残されていないはずなので、東京のほうの話だろうか？ 別紙リストによると、総面積は49万6400エーカー。

「……えっと、確か1エーカーが4000平方メートルくらいだから……2000平方キロ弱ってとこ？」



……って待て。

「東京区まるまるひとつ分くらいじゃない!？」

「あーん？」

流石に、椅子を蹴飛ばしての二度目の大声は見逃してはもらえなかったようで、立ち上がった私に、朝倉先輩を筆頭にして周囲の視線が集中する。

「……あ」

静寂の落ちた研究室の中、集まる奇異の視線から逃れるように、私はそそくさと研究室を後にした。



「……参ったなあ」

色んな意味でぼやきつつ、場所をキャンパス内の広場に移し、芝生上のベンチに陣取って。改めて取り出した封筒の前に、私は盛大に溜め息をついた。

強制執行、法的措置、譲渡契約。どれをとつても不穏な単語しかない。こう言ってはなんだが、この宇佐見蓮子、多少の結界破りはすれどもこんなトラブルとは無縁で生きてきたつもりだ。降ってわいた土地不法占拠の訴訟書類にどう対応すべきかなんて、いち学生の身に





余る問題である。

封筒の裏、住所の下にはアドレスが併記されていた。試しに複合体で読み取り検索を試みたところ、結果のトップに出てきたのは実在する公的機関のノードだった。名称も封筒のものと同一第六大陸開拓公社となっている。

しかし更新は頻繁ではなく、活動内容の説明も数行でまとめられている程度。信憑性があるような気もする一方で、その気になれば騙ることも簡単に出来そうにも思える。

「人類の発展と、科学の進歩のために」。第六大陸開発公社、ねえ……」

公社の理念とやらと一緒に何度もその名前を舌の上で転がしてみるが、やはり身に覚えのないものだった。

法的措置だとかはさておいて（置いていいものでもないが）一番の問題は、私自身が書面にあるような資産とやらに全く心覚えがないことだ。それで立ち退けと言われても困る。しかし勘違いや良くある詐欺の類で済ませてしまうには少々話が大幅さだし具体的だ。

……なによりも。

こんな面白そうなことを、単にそれで済ませてしまうのは私の探究心が許さない。

本当ならすぐにでもメリーに見せびらかしたいところなのだが、確か彼女は今超心理定弦学の講義のはずだった。連絡はメールだけにとどめておいて、もう一度書面に向き直る。

3枚目以降は、法律に基づいたあれこれの手続き書面。都合5枚以上、あれこれと執行の

正当性だの和解を求める書面だの、ややこしい言葉が並んでいたが、理系の人間にはこの類の言い回しは厳しい。読み始めて3枚目であえなく意識を失いかけ、私はベンチの手すりにごつんと頭をぶつけた

「いかんいかん……」

痛む額をさすり、眉をしかめる。

とりあえず斜め読みして確認する限り、要するに開発に必要な土地から私に立ち退けと言っているらしいことは読み取れる。立退き執行に際して移転のための費用は支払われるそうだが、その金額は雀の涙。どこの秘境か知らないが、50万エーカーの土地に対してはあまりに二束三文だ。

第一。

「そんなこと言われたってなあ……」

自分にも見覚えのない土地を、お前は迷惑だから立ち退けと言われたところで、すぐにハイと頷いて応じるべきなのだろうか。相手がどんな組織なのかもよく分からないし、そもそも根本的に詐欺の線だって消えていない。

どうしたものかとベンチに背中を預け、コーヒーパー手に封筒を弄ぶ。

もしや隠しメッセージでも潜ませてあるんじゃないかと、封筒をお日さまに翳してみる。もちろん、そんなものがあるわけはなかったんだけど――





「……つて、これもしかして……!!」

封筒前面の『of the Continent第六大陸』のロゴマーク。その図案化された印章に、私は確かに見覚えがあったのだ。



「……おつかしいな……こっちに持ってきたと思ったんだけど」

積み上げた収納ボックスをひっくり返し、引つ張りだしたファイルから中身をぶちまける。書類の山を探って手掛かりがないのを確かめては、次へ。床の上に散らばった記録メディアを避けながら、荷物を掻きまわす。

本棚は真つ先に確認して、目当てのものが無いことは判明していた。進学の際に荷物と一緒に放り込んでいた気になっていただけ、勘違いだったのだろうか。

クローゼットに放り込んだままにしていた段ボールに顔を突っ込んでいるところで、インターホンが鳴る。さつきは怪しげな勧誘だったのでエントランスで追い返したが、今度は間違いない見覚えのある顔。

かちやり、と合鍵を使って入ってきたメリーは、室内の状況を見るなり眉を潜めた。

「蓮子、一体何の騒ぎ？ 泥棒でも入ったの？」



「ああ、メリー、上がって上がって」

「上がるところがないわよ。これでお客さんが来たら大変じゃない」

爪先立ちで床上に散乱する荷物の隙間をよけながら、メリーは私のベッドの上へ。呆れた表情でちよこんと正座する。

「こんな時期に大掃除？ それとも夜逃げでもするのかしら。犯罪の片棒はごめんよ？」

「さんざん結界暴きやつという今更よね」

ツッコミを入れた上で、私はテーブルの上にある封筒を示し、手短に事情を説明する。

「要するにね、私、月の土地を持つてるみたいなのよ」

口に出してみると荒唐無稽な話だ。流石にメリーも、しばらく瞬きをして首を傾げていた。

「蓮子、ひよつとして脳が」

「違うわよっ!!」

いきなり失礼なことを抜かしてくれる親友の頬をむにとつまむ。

「あーもう、四六時中寝惚けてばっかのこの口が言うか、この口がっ」

「んうー、れんこ、いひゃいー」

ぐにゅーと伸びるほっぺたはやたらやわらかくてやけに触り心地が良い。くそう胸だけじゃなくてこんなとこまで女の子の子のおつて。

メリーの頬から手を離し、吐息をひとつ。



「前に話したわよね。20世紀の宇宙開発競争の時代に、人間が月に移住する未来がすぐにやってくるって信じられてたって話」

「ええ」

「その頃にね、月の土地の売買なんて商売があつたらしいのよ」

もちろん、実際に現地を訪れ、月の土地に枠線を引いて切り売りしていた訳ではない。この商売を思いついたのは月旅行の手段すら持たない、ある民間企業だった。

人跡未踏の地を誰のものにするかという争いは、人類の発展と共に続けられてきた。

第五大陸

地上で最後の大陸、南極について不干渉条約が結ばれ、世界のどの国家も個人も所有することができないと定められて以降、人々の興味が天上の星々へと向けられたのは当然の成り行きだったのだろう。

そして、人類の月到達が現実的なものとなり始めていた20世紀後半。

アポロが月へと辿り着く3年前に、Outer Space Treaty『宇宙条約』——正式名称「月その他の天体を含む宇宙空間の探査及び利用における国家活動を律する原則に関する条約」が国連総会で採択さ

第六大陸

れ、2222番目の決議となって、天の月はいかなる国家も領有することができないと定められた。

しかしこの決議が禁じたのは国の領有のみ。個人による月の土地の保有については一切触れられていなかったのである。

そもそんなことを言い出す相手が出てくるなんて想定されていなかったのだろうけれど——決議に書いていないなら『大丈夫だ、問題ない』とばかりに、月の土地の切り売りは始まったのだ。

月面売買市場の旗を振ったのはアメリカの実業家、デイロス・D・ハリマン。月ロケット燃料を扱う会社のトップだったという。

「確か、一番立地のいい静かの海では一エーカーあたり37.5ドル。安い所だと蒸気Mate Vaporumの海で18.95ドル。当時の物価なら数千円くらいね。お買い得よ」

「……それって安いのかしら。誰も住んでないのに」

「別荘でも建てるつもりだったのかもね。その頃は、あと十年もしたら人類が月に移り住んでる未来が当たり前だったみたいだから。地下に眠るウラニウムやダイヤモンドの採掘権まで含めてっていうから、奮った話よ」

無論ながら、埋蔵量があるかどうかなんて眉唾で、仮に掘り出したとして持ち帰る手段もない。それでも当時の人気はかなりのもので、月の土地取引は活発に行われ、一攫千金を企む人々を巻き込んで拡大していった。

「ちなみに月の表面積は約3800万平方キロ。アポロ計画にかかった予算の2倍も払えば、月面全部を買い占められる計算ね」

the highest building in the Moon
「私だけのお月さま、ねえ……」





さすがにこの事態を看過できなかったか、少し後になって個人を含むあらゆる機関に地球外の不動産の所有を禁止する協定が持ち上がった。だが、様々な思惑が絡んだ結果か、そこらは世界で十カ国に満たない国しか批准せず、有名無実化してしまっている。

そうした意味でも、当時の人々が月に並々ならぬ興味を抱いていたことが窺える。

月を足掛かりに火星、木星、そして太陽系を飛び出し広大無辺な外宇宙へと。そこにはかつての大航海時代のような開拓への期待があったのかもしれない。

「で、その会社と蓮子がどう関係してるのかしら」

「うーん。まあ要するにさ、当時、月の土地なんて言っても直接行けるわけもなければ見ることもできないわけでしょ？ この商売ってあくまで口約束なのよ。売り買いしたって事実があっても、これが不動産として扱われるかは果てしなく疑問だったわけ」

だからこそか。二匹目どころか十匹も二十匹も泥鰌を狙った商売があちこちで立ち上がっていた。

もともと胡散臭い商売をさらに真似した訳だから、二重三重の重複決済も当たり前。惑星と一緒に何百光年と離れた恒星の日照権すら売買されていたことまであったという。

実在しないでたらめな数字と地名の書かれた紙切れ一枚に高額な出費を強いられた詐欺まがいの事件も記録に残っている。

そんな中に、今回の権利書が出てくるのだ。

「これよ」

机の上、アルバムの一枚に挟んでいた写真を示し、私は溜息をついた。

フレームの中に収まっているのは年配の男性——背中に抱きついているのは幼い頃の私だ。
「ひいお祖父ちゃんよ。覚えてる？ メリーも一緒にお墓参りしてもらったけど」

「……ああ」

メリーがぼんと手を叩く。

宇佐見景一。——まあ、苗字が目立つので一般的には宇佐見教授で通じる。私の母方の曾祖父にあたる人物だ。

天文学を志し、研究に生涯を捧げた学問の徒。天体の運行と星命学に関する論文と著書があるらしく、東京の復興や京都の都市計画にも参加した。天文分野の歴史を紹介するメディアアなんかで取り上げられることもある。

遷都前の東京の大学で教鞭をとっていたこともあり、専門分野以外にもそれなりに知られていた人物だったらしい。私も苗字をきっかけに、大学で教授や先輩から、曾祖父の話をされることがあった。

「亡くなったのは結構前なんだけど、そのちよっと前にね、プレゼントだって何か渡された気がするのよ。で、気になって調べてみたら、案の定」

「本当に？ 蓮子が？」





「気付かないうちに大地主よね。50万エーカーよ？」

目を丸くするメリーに、いやはや、なんとも言えない気分で肩をすくめる。私も自分で日記を読み返すまでは半信半疑だったのだから、仕方のないことではあるけれど。

書類を取り寄せてみたところ、月面の南極エイトケン盆地を中心に、確かに私名義の土地とされている資産の記載があった。もともと実在してもいない財産の分与だったため、相続では正式に取り扱われることはなかったらしい。実に常識的な判断だろう。

しかし、どういう具合かこの月の土地の所有権、ある程度正当性のある資産として登録されており、私が資産として所有することにもそれなりに法律に則った手続きがなされていた。もともともこの手続き自体、今回のように公社から月面開発の問題が立ち上がらなければ気付かないまま埋もれていたもののだろうけど――

「海外の企業だから、そのへんの取り扱いが厳密なのかしら。そういう話よく聞くわよね」
「こっちにしちゃいい迷惑よ。確かその時にもらった手紙があったと思うんだけど……小さい頃のことだから、記憶が曖昧でさ」

「それでこの惨状なわけね」

メリーはベッドに仰向けになると、机の上の封筒と書類を手にして、天井の明りに透かすようにして見る。ウサギが跳ねる月を意匠化した、開発公社のロゴをそっと撫でて、

「どうするの？」

「どう、つて？」

「月の土地を売っちゃうのかつてことよ」

クローゼットを漁る手を止め、私も頭上を振り仰いだ。

「んー。まあ、今話し合いに応じれば、向こうもそれなりの金額を支払ってくれるらしいし。

土地の価格にしちや安すぎるけど、学生のお小遣いには十分すぎる額だわ」

「倶楽部活動も安泰ね」

「そもそも見たことも行つたこともない場所の土地を立ち退けつて言われても、こつちも居座る気も微妙に無いんだけどさ」

——そう。別段、問題はないはずなのだ。今日の今日まで忘れていた月の土地なんて、こたわる理由はないはず、なのだ。

けれど。

「なんか、さ。メリーが夢で見たつて言う、ウサギさんのことが気になるのよね」

この時期に、何の意味もなく月に関するメッセージがメリーの夢に現れることが、やけにタイミングの良すぎる話に思えてならない。

月から遠く離れ、

戻ることもできず、



空の向こうに離れた38万キロの彼方の故郷を見上げ、
目を泣き腫らすウサギ達。

何故か。そのイメージが、どうしても頭から離れなかった。

黙り込んでしまった私を最後に、静かな沈黙が落ちる。

「……………」

メリーは何も言わず、私の返事を待っていてくれたようだった。手ごたえのないクローゼットの扉を閉め、ふうと吐息を一つ。

「ねえメリー。明日から3日くらい、自主休暇にしない？」

我ながら実に唐突な台詞にも、メリーは動じることなく仕方ないわねと頷いてくれた。
ほんの少しばかり、諦めが混じった笑顔と共に。



47 ケイヴァリットジャーニィ





一面の車窓を、広大なスケールで立体多重映像の浮世絵が流れてゆく。何度見ても飽きないよう工夫の凝らされた全面カレイドスクリーンの荘厳な姿も、今はほとんど頭に入らない。ヒロシゲが結ぶ西京都から卯東京までの53分は旅の感慨を噛み締めるのには短すぎるが、早く気持ちからすればまだまだ長いものだった。

「でも、本当に急よねえ」

「思い立ったが吉日よ、メリー」

そんな事を言いつつも、急な予定にしっかり付き合ってくれているわけで、持つべきものは良き友だ。照れ臭いので口には出さないけど。

目指す先は曾祖父の邸宅。東京の私の実家からもさらに離れた、北関東の山間の一軒家だった。

もとは親戚の別荘だかを天体観測用に改築した家で、曾祖母と結婚する前から曾祖父の住まいだったらしい。在職中は世界各地を飛び回っていた曾祖父だが、教授職を引退後は、ここに腰を落ち着けて晩年を過ごしていた。

私が曾祖父と顔を合わせていたのはいつも、親戚一同が集まる東京の実家だったから、こ



を訪れた記憶は幼い頃の数度くらいしかない。

付近にめぼしい観光名所もなく、過疎の進んだ集落が、数キロ離れた場所に残っているだけ。ほとんど地図とGPS頼りの道行だった。

「そんなに焦らなくても、お家は逃げないと思うわよ」

「……落ち着かないんだからしょうがないじゃない」

複合体で行程を確認している私の横で、メリーがやれやれと笑みを覗かせる。

「どんな人だったの？ 蓮子のひいお祖父様って」

「……そうねえ」

端末を閉じ、顎に指を添えて記憶を巡らせる。

曾祖父が天文の分野ではそれなりに名の通った業績を残していたのだというのは、私も大学に入ってから知ったことだ。

学閥には属さず、在野の研究者と積極的に交流を行って、その膨大な資料を整理、統計づけて業績を残したという。天文と星命を関連付ける論文は、遷都の折にも結界理論の基礎となり、いまでも評価されているそうなのだが——私にしてみれば、星座や月、惑星の話をたくさんしてくれた人、という以上の印象はない。

「小さい頃にしか会ってないんだけど——そうね、いつも空の話ばかりしてる人だったわ。東京には本当の空があるんだって」





「高村光太郎も形無しね」

霊的守護を張り巡らされた首都圏の京都では、正しき星辰の位置を整えるために、空に人工衛星を打ち上げ、星暦や星座を補完して安定を保つことがされている。

しかしそうやって作った空は、空気が澄み星々は美しくとも、本当の星空ではないのだと、そんなことを聞かされた記憶があった。

「空のこと、星のこと、月のこと。たくさん宇宙の話を教わって——そう言えば、私の眼のことに一番最初に気付いたのも、ひいお祖父ちゃんだったかなあ」

蓮子の眼は船乗りの眼だ。……確かそんな話だっただろうか。

遠い昔、帆を風になびかせ大海を旅する船の上で、船乗りは夜空の星と月を見上げて自分の居る場所を知り、今の時間を知ることができたという。

もし私が遠くこの星を離れて遙かな銀河の果てに旅立ったとしても、私の眼はこの星のこの国の時間を刻む。それにはきつと大切な意味があるのだと、曾祖父はそう言って、膝の上に居た私の頭を撫でてくれた。

多分。私が今この道にあるのも、その時の言葉に導かれたからかもしれない

「月の土地を私にくれるっていう約束も、その時にしてたみたいなのよね」

そんな曾祖父が他界したのは私がまだ幼稚園の頃だ。

ひっそりで行われるはずだった葬儀には、国籍も人種も多様な大勢の参列者が訪れ、私は



そこでやっと曾祖父が多くの人に慕われていたということを知ったのである。

「立派な方だったのね」

「どうかな。……親戚の間だと、今どき変人だつて言われてる雰囲気だったみたいだけど」

「学問の徒には褒め言葉じゃない、それ」

実家に電話を試みたところ、やはり曾祖父の遺産のほとんどは手つかずのまま残されているらしい。夜遅くの電話にも関わらず、お祖母ちゃんは快く当時のことを話してくれた。

お祖母ちゃん——祖母はほとんど、自分の父親である曾祖父の研究のことを知らなかった。ひいお祖母ちゃんも、古風な人だから仕事には口を出さないようにしていたのだとか。

月の土地のことも、一度も聞いたことはなかったという。

「そう言えば、私も調べてみたんだけどね」

メリーが思い出したように複合体を展開。結合したPANからファイル共有で差し出されたそれは、電子化された曾祖父の著書だった。

「論文の方は見つからなかったんだけど、こっちは学内図書館のアーカイブにあったのよ。落ち着かないなら、着くまで読んでるといいんじゃない？」

「うわ、ありがとメリー。恩に着るわ」

メリーからデータを受け取り、端末を開く。

タイトルは『科学世紀に失われた月』。重々しい装丁の本ではなく、写真を取り込んだシン





ブルな表紙。天文学というよりも、エッセイめいた宇宙の雑学、という体のものだ。

人々の心より、月が失われて久しい。

……そんな書き出しで始まる文面に、いつしか私は没頭していった。



……。

……………。

人々の心より、月が失われて久しい。

過去、空に在る太陰として太陽の対となり、崇拜され信仰され、世界中の文化に根付いていた月。それが忘却のモノとされてしまったのは、果たしていつからなのだろうか。

人類にとつての歴史、つまり時間の経過を意味する「暦」の語源は「日読み」であると考えられる。一方で「ツクヨミ」たる太陰暦の衰退著しきことは、論ずるまでもなく明らかだろう。

いまや世界標準時を定めた唯一の暦が地上を覆い尽くし、日々厳密に誤差を改められ、徹底

的に管理されている。

時節により姿を変えて定まらぬ月は、人類の指針として相応しからずと忘れ去られ、太陽こそが明確な天の支柱で在ると定められたのだ。

人類はたゆまぬ進歩を刻む中で、移ろい定まらぬ月を捨て、不変なる太陽の輝きを選びとった。これは人類が、地上より妖怪や幻想、魔法と云う月の領域に住む者を迷信と切り捨て、駆逐していったことの証左であろう。

そして、それは本邦においては遙か過去よりなされてきた行いでは無いだろうか。

遡るならば神話の時代より、アマテラス、スサノオと共に生まれ、三貴子として一緒に祀られていながら、本邦の月神ツクヨミは神話の中に殆どその足跡を残していない。文献に拠っては其の僅かな記述すら、他の神の功績とされる。

いまや太陽の対である筈の月は、何故居るのかも分からぬ程にその存在を希薄にされてしまっている。

文明開闢より数千年。ついには人の手の届く場所まで引き下げられた月へ、人類はあの偉大なる一步を踏んだ。いまだ、熱かい悩む灼熱の神火に触れる事はできずとも。人類はより手近な月を、重力に結わえられた岩塊であると見定めることに成功したのである。

不変にして唯一の暦法が地上を支配し、月よりも遙かに精巧な周期で天を巡る人工の衛星が地上を監視せんと眼を光らせる。





人類が、地上の何処からでも、己が世界の中心であることを実感できるように。
かつて、人が夢と同じものでできていると信じた神秘の珠は、かくしてこの世に不要とされたのだ――。



……。

……………。

「……ひいお祖父ちゃん、こんな研究してたのね」

図書館に、実家の本棚に著書を見たことはあるが、身内ということもあつて、積極的に読むようなことはしていなかった。

なんというか、本当に学問を志していたとは思えないような、詩的で幻想的な発想。論文ではなく著書なのだから、専門的なものに終始する訳にはいかないのかもしれないが、それにしても、まるでおとぎ話のようだ。

……天の光を全て星と見上げる職業であれば、案外とこんなものなのかもしれないと思わなくもないけれど。



「ふうっ……」

気付けば随分熱中していたようだ。

いつの間にか、メリーは椅子にもたれ、寝息を立てていた。あまり眠れていないというようなことを言っていたのを思い出す。

「ちよっとお手洗い行ってくるわね」

「んー……」

半分夢の中のメリーに見送られ、席を立った。

車両端のトイレで用を済ませ、ついでに何か飲み物でも調達しようと、隣の車両まで足を延ばすことにする。

（月が失われて、か）

……個人的には、科学が闇を払うという表現は、あんまり好きではない。

実践科学に身を置けばおくほど、世界は解析不能の不思議に満ちていることを思い知らされるばかりだ。世界の秘密を解明せんと、あらゆる物事を微小に切り分けて、それでなお科学は多くの謎をこの世に積み上げてしまった。

世界を作る法則はあまりに複雑で、難解だ。ほんとうに創造主がいるのなら、もう少し単純にできなかったのかと文句の一つも言いたいくらいに。

予算と物理量の壁に実践は廃れ、いまや物理学の最先端は理論の匣の中に閉じ込められて





いる。私たちの世代の研究者の多くが、シミュレーションを含めて観測や測定を行ったことがないというのだから、前世紀には考えられないことだろう。

……神は隙間に潜む、と言う。

人がいかに叡智を誇ろうと、その観測できる事象を増やしていこうと、事象と事象の間、未知、不可知の隙間に潜む存在は消えることはないのだ。

「まさしく悪魔の証明よね」

前世紀の終わりと共に提唱された超統一理論によって、四大力の統合が始まって数十年。4つの力最弱の重力こそなんとか従えたものの、人類はいまだに太陽系を飛び出してすらない。

マクスウェル

ラプラス

デカルト

ゲ

ー

デ

ール

悪魔や魔物を滅ぼしても、悪霊に神の不在証明は依然として健在であり、ケイヴアーリットの発見なんて夢また夢。車椅子のホーキングの再来でも起きなければ、理論物理学の発展にはなお百年以上の時間がかかるだろうと目されているのだ。

——と。

他愛もない考えに耽っていたからだろうか。席へ戻ろうとドアを開けたところで、向こうからやってきた乗客と肩が触れてしまう。

「あ。ごめんなさ——」

視線を上げ、続けるべき謝罪の言葉の端を、私は思わず飲み込んでいた。

上から下まで、黒で統一された装いの二人連れだった。猫背ぎみの長身と、子供みたいに小柄な姿が、行く手を遮るように立ちちはだかる。

車内だというのに黒のスーツとダッフルコート、同じ色のソフト帽を深々と被り、サングラスで視線を隠す装いは、まるでカレイドスクリーンに落ちたインクの染みのようだった。

そう、まるで機密に近付く者を処分する、黒服の男たち——

「宇佐見蓮子さんですね」

「……違います」

咄嗟に口をついて出たのは否定の言葉。知らんぷりを決め込んで、無理矢理二人の間を通り抜けようとした私の手が掴まれた。

「待ってください。あなたに話があります」

「違います。人違いです。……離して！」

頭の奥で激しく警鐘が打ち鳴らされる。

ヤバイ。なんだか分からないけどこれはヤバイ。なんなんだ一体。

困惑しながらも掴まれた手を振りほどこうとするが、細いくせにすごい力がかつちりと押さえられ、びくともしない。

「宇佐見蓮子さん。我々はあなたに警告をします。あなたの所有する——」

『間もなく卯東京……卯東京……終点でございます』



硬直していた私を解き放ったのは、ヒロシゲの到着を知らせるアナウンスだった。

「——ッ！」

振り解こうとしていた手を、その逆向きに——身体ごと黒服達に体当たり。二人を突き飛ばして、席とは反対の方向に駆けだす。後ろ手にドアのロックを外し、転がり出るように列車の後方へ。

「っ、待て！」

「馬鹿、撃つな！ 追うぞ！」

（冗談じゃないわよっ……!?）

できれば聞き間違いであってほしい、剣呑なやりとりが聞こえてくる。

同時に後ろからどかどかと複数の足音が響き始めた。背中で騒ぎが広がり、何かを突き飛ばす音、押しのけられる乗客たちの小さな悲鳴、怒鳴るような声が続く。

間違いない。あいつらは私を追いかけてきている。

——ちよつと待て。何が起きてる。どうしてこうなった。

私はいつの間に、非日常の境界を飛び越えてしまったというのだろう。

問いはすれども、混乱する思考は疑問符をまき散らすばかりで、答えを返してはくれない。

あいつらは私を知っていた。まっすぐに私を狙ってきた。でも、どうして私の顔が知られている？ 第一、私がこの旅行を思い立ったのは昨日の夜だ。いまヒロシゲに乗っているな

んて、どうやって突きとめた？ まさかずっと尾行されてたとしても——？

——さつき来客があつたぞ。黒服の二人組だ

——これでお客さんが来たら大変じゃない

脳裏をよぎる、ここ数日の出来事。

(まさか——本当に!!)

胸の中で膨らむ恐怖心。それをドアの向こうに遮断するように、ヒロシゲの中を疾走する。すでに車内は下車の準備に席を立つ乗客たちの姿があり、私はいくつもの不満の声を背中に、通路の間を縫うように走った。

3両目を過ぎたところで、携帯を引っ張り出してメリーに短縮コール。

(早く……)

緊張と全力疾走で鼓動が跳ね上がる中、呼び出し音の1回が果てしなく長く感じられた。

(早く出てつてのに……!!)

どうにか4コール目で通話が繋がる。電話口にメリーが出たときには、背中じゅうに汗が浮かんできた。

『……どうしたの、蓮子？ もう到着するわよ』





「ごめんメリー、荷物お願い!! 改札出てて!! 後で合流するからっ」

『は? ちょっと蓮子、何言って——』

「よくわかんないのよこっちだって! 怪しい連中に追われてるのっ! メリーも気をつけて。じゃね!!」

『あ、蓮子!?!』

返事も待たずに通話を切り、ついでに電源もOFFにしてポケットに放り込む。

幸いにして切符はお財布の中だ。ゆつくりと減速を始めたヒロシゲの車内で、疾走を再開した。乗降口へと並ぶ乗客たちを掻きわけるように、車内をひたすらに走る。

ドア前の列を突っ切るときに肩や手足が触れ、突き飛ばされた乗客たちから次々に文句が上がった。

『ごめんなさいっ、急いでるんで!!』

こんな事態で無ければ礼儀正しくお詫びをしたいところなのだが、こっちはそんな悠長なことをしている場合じゃないのだ。

「……っ、は……っ」

焦燥と緊張に息が上がり、呼吸まで辛くなってくる。

何度も後ろを振り返るが、今のところ黒服達が近付いてきている様子にはなかった。こっちは一人、向こうは少なくとも二人。人数差の分だけ、車内を突っ切るのには時間がかかるは



ずだ。流石に乗客全員を押しつけて走るわけにもいかないだろう。

行く先に彼らの仲間がいないことだけを祈りつつ、懸命に先を急ぐ。

「……………」

辿り着いたヒロシゲの最後尾、到着までの数十秒は、まるで数年のようにも感じられた。

「……着いた……!!」

乗降客でごった返すホームの中、視線を左右に振って『やつら』の姿が無いことを確認すると、私は手近な階段を駆け降りる。

……ヒロシゲは京都と東京を直通で結ぶ新幹線ゆえに、途中下車というシステムはない。

だからあの列車に私達が乗っていた以上、卯東京駅で私達が下車することは確実なのだ。待ち伏せの可能性は十分だった。

(メリー、無事でいてよね…………!)

あの黒服達が、どこまで知っているのか。

もし彼等がメリーの眼の事まで掴んでいるとなれば、黙って見逃すとも思えない。脳裏をよぎる最悪の想像を振り払い、構内を走る。

弱気になっている場合じゃない。なんとかここであいつらを撒いて、メリーと合流する!! 硬い決意とともに、歯を食いしばって走り続けた。

そこらの人混みから、あの黒服がによつきりと顔を出してきそうな錯覚に怯えながら、売



店や通路を迂回して、出来る限りの最短距離で、けれど追跡を避けるように迅速に――

柱の陰から慎重に様子を窺い、全速力で改札を突破……した、その瞬間。
背中から、不意に肩を叩かれた。

「うわああッ!!」

思い切り悲鳴を上げてしまい、飛び上がって振りむいたその先には。

「……なによ……いきなり大声……出して」

涙目で耳を塞いでいる、メリーの姿があった。







▼
ごとごとと上下する窓の外には一面のひまわり畑が広がり、高い初秋の空の下に鮮やかな黄色を広げていた。水素発電の蒸気を吐きだすマイクロバスは、最寄駅の都市部を離れて一路、郊外の未舗装道路を北へと走る。

「……だーかーらー、しょうがなかったって言うてるじゃないっ。あんな怪しい連中が追っかけてきたのよ!」

「はいはい、そうね。蓮子は大変よね。なんたつて謎の秘密組織に狙われちゃってるんですものね。ヘンな菓飲まされて、子供にならないように気をつけなきゃ」

「あーもうっ! 見間違いとかなじゃないんだつてば。メリーだつてあんなつたら同じことしたわ! あいつら鉄砲まで持ってたんだからね……!」

私鉄をいくつも乗り継ぎ、乗客もまばらな終点駅からさらに乗り換えたローカル線のバスの中、私とメリーとの言い合いは未だに続いていた。

どういった経緯であれ、私がメリーを放り出してヒロシゲを飛び降りたのは事実であり。メリーが二人分の荷物を抱えて右往左往する羽目になったのもまた事実である。

もともと今回の旅行、東京での乗り換えには十分時間の余裕を見ており、冷温停止した旧

東京駅やカイジュウの灯の観光もしていこうという予定だった。それを一方的に私がキャンセルしたのも確かであり、メリーが機嫌を悪くするのももつともである。

しかしこれは私にも切迫した事情があつてのことであつて、妄想に取りつかれて相棒を巻き込んだと解釈されるのは誠にもつて遺憾なのであつた。

「はあ。……もういいわよ。怒つてるんじゃないんで呆れてるんだし。今後氣をつけてくれればね」

「うー……」

どうみても、お化けを見たという子供に接するお姉さんの対応だったので、私は顔を窓の外に向けたまま口を尖らせる。

「蓮子、貴方疲れてるのよ」

「その台詞、いまは冗談でも聞きたくないわ……」

げんなりとしてシートに突つ伏す。こちらの氣分も知らず、意地悪な笑顔で冷凍蜜柑を剥いているメリーは、冷たそうにオレンジ色のひと房を口に運び、んー、と暢気に甘さを堪能してから、

「まあ、蓮子の見たのが仮に見間違ひじゃなかったとしてよ？ それで、なんで蓮子が追われなきゃいけないわけ？ いまさらわたしたちの結界暴きがバレたつて事かしら。……それなら追いかけてくるのは黒服の殺し屋じゃなくて行政の職員か、警察よ」





「それは、ほら。ひいお祖父ちゃんの月の土地に、本当はすごいものが埋まっていたから、正規の取引では扱えなかった……とか」

「向こうから招待状が来てるの？ それに、契約自体は大した法的効力もないんでしょ？ 蓮子もひいお祖父様のことが無ければ売るつもりだったんじゃない」

「うーん……じゃあさ、公社の開発を邪魔したい別の勢力があつて、とかさ」

我ながら苦しい言い訳の気もする。第一、それだったらあんなに怪しい方法で接触してくる理由がない。腹の底がどうあれ、少しでも私に信用されようとするはずだ。

「ええ。そうね。そうよね。ひよつとしたら、私達が知らないうちにとんでもない重要機密を掴んじゃつて、それを隠蔽に政府の秘密組織が動いたのかもしれないわね。ほかにいくらでも人氣がないところなんてあるのに、わざわざ他の人もたくさん乗ってる、セキュリティだって厳重な新幹線の中で、すつごく目立ちそうな同じ黒服の格好でね」

「もお……メリーの意地悪っ。そんな言い方しなくていいじゃないのっ」
ぷうっと頬が膨らむ。

私だって、冷静な頭で考えればさっきの状況が極端におかしいものだというのは分かっているのだ。

秘封倶楽部のサークル活動が法に触れる類のものであるのは確かで、これまでにもしっかりと注意を受けたことはある。



しかし、確かにメリーの言うように、それが問題にされるなら、やってくるのはあんな怪しき満載の黒服集団ではなくて、お巡りさんか司法に任意出頭を求める通知だろう。

「……でも、追いかけられたのは事実なのよ。警告だ、なんて言つて」

「気付かないうちに邪魔でもしちゃったんじゃないかしら？ そうじゃなきゃ、ヒロシゲの案内をして欲しかったとか。大体そんなところじゃないの？」

「うー……。そんな和やかな雰囲気には見えなかったんだけどなあ」

どこかのマフィアが乗り合わせた車両に、たまたま踏み入れてしまったと考える方がまだありそうにも思えてしまうのがなんとも。どっちにしたところでまず起こり得ない偶然ではあるのだけど。

「それに、もう誰も追いかけてきてる訳じゃないんでしょ？」

メリーの言葉通り、あれから彼等が私達のあとを尾けている様子はなかった。列車を乗り継ぐたび、あたりを警戒している私をメリーは呆れたように見ていたが、怖いものは怖かったんだからしょうがない。

いまは乗客二人だけのバスで、前後の山道には車どころか人通りすらない。これで気にしろという方が無茶な話ではあるのだ。

太陽はゆっくりと天頂を過ぎ去ろうとしている。

ヒロシゲの切符が9時京都発、という時間だったので、着く頃にはおやつ時間だろう。





ゆつくりと揺れるバスの中、時間をもてあまして、私はつい口に出していた。

「……あのさ、メリー」

「なあに？」

「ひいお祖父ちゃん、なんで月の土地なんか買ったんだと思う？」

そのことはずっと疑問だった。学問の徒が研究対象を独り占めすることは、あまり褒められたものではないはずだ。

それに、一口に50万エーカーと言ったところで、改めて考えるまでもなく広大な敷地だ。

仮にジョークであつたにせよ、特例割引で安く買い叩いたにせよ、東京がまるまる収まつてしまう程の広さの土地を売り買いするなんて、ちよつと普通とは言い難い。どれだけ少なく見積もっても、何千万。下手をしたら何億というお金が必要なはずだった。

……少なくとも私は、曾祖父がそんなに裕福な人だったとは知らない。むしろ、いつも忙しくしているのに、何年も背広も変えずにいつも同じ、よれよれの格好をしていたような覚えもある。有り体に言えば、貧乏だったはずなのだ。

月を自分のものにしてみたかった？ 他の人に譲りたくなかった？ 想像はしてみても、それが自分の中のひいお祖父ちゃんの姿と重ならない。子供みたいに空を見上げ、月を、星をずっと見つめていらればいいような人だと、ずっと思っていた。

「それに、私にそれを遺そうとしてくれたのは、どうしてなんだろうなって」

「きつと、蓮子がこんな、不良オカルトサークルにうつつをぬかすような子になっちゃうって分かってたんじゃないかしらね？」

「むうー……」

それを言われると返す言葉がない。メリーは手の中の蜜柑から綺麗に筋を取ってゆく。

「まあ、冗談は置いといて。きつと蓮子がなにかを見つけてくれるって信じてたんじゃないかしら。だって、退屈しないのは確かよね。いつも妙な話ばかり持つてくるし、思い立ったら唐突だし。秘密組織に陰謀に、困った話題にも事欠かないしね」

「だからもういいでしょその話は……」

バツの悪さに帽子のつばを下げ、視線を隠す私。

「……でも、だから蓮子には感謝してるのよ？」

「え？」

「秘封倶楽部に誘ってくれたことよ。楽しいもの。蓮子と一緒にだと。それに、サークルがなければこんな風に、あちこち冒険なんてできなかったと思うしね」

「……………」

呆氣にとられた私の唇に、冷凍蜜柑のひと房をちゃんと触れさせて、メリーは微笑んだ。唇に触れる冷たさと共に、溶け出す甘さが口の中に広がってゆく。

——ああもう。





そんな大事なことを、いきなり言いおつてこの子はっ。

「だからそんなに——つて蓮子？　ねえ？」

「メリーい!!」

「きやあああ!!　ちょ、やめ、何いきなりっ……つてどこ触ってるのっ」

「メリー、愛してるっ、大好き——!!」

「離して——っ!!」

……………。

……。

……えーと。

感極まってしまった私が悪かったのですが、騒ぎすぎて運転手さんに注意され、気まずい気分バスから降ろされるまでそんなに掛かりませんでしたとき。



「はー……到着到着……」

ぼすん、と荷物を投げ出して、すっかり固まってしまった背中を伸ばす。

ひいお祖父ちゃんの家は、幼い頃の記憶にあるのとそっくりそのままの姿で、段々畑の広



がる山間の一角にあった。

東京を遠く離れ、北関東の森の中の一軒家。 蔦の絡まった3階建てのレンガ造り。 屋上には雨風に晒され苔の生えた望遠鏡とアンテナが並んで空を向いている。

ドアの門柱には、レトロな字体で「宇佐見」の表札。 天の星月に魅せられた教授が生涯の住処とした場所である。 途中の人家で道を訪ねたところ、『ああ、宇佐見さんの天文台ね』で通じるくらいには有名だった。

「随分遠かったわね……」

大きなトランクにもたれて、メリーはだいぶグロッキーの様子。 あの距離を引きずってきただから、そりやあ疲れただろう。

空はいまや赤らんで、東には濃い藍色、西には鮮やかな橙に彩られ、山間に切り取られた空には紫のグラデーションが揺れている。

「暗くなる前に入っちゃいましょう。 もう何年もほったらかしだから、掃除もしないのだし」

遅くなった原因を作った身としては、追及の前に積極的に話題を反らしたいところである。 伸ばした手が赤錆びた門に触れると、格子の扉はぎいと軋みながら開いてゆく。 ぼうぼうの草を踏み分けるように煉瓦の道を進めば、分厚い樫の扉。

お祖母ちゃんに聞いていた通り、郵便受けの下にガムテープで張り付けてあった鍵を取り





出し（いまだき物理錠なんて京都じゃまず見かけない）、ドアを開ける。

ぎい、と開いた奥はすっかり薄暗く、人の手に触れない無言の気配に満ちていた。

そっと靴を脱いでフロアに足を下ろしてみるのが、思いのほか埃は積もっていない。これなら軽く掃除をすればベッドぐらいいは確保できるだろう。

「ただいまー」

なんとなく口にした挨拶も、無人の部屋の奥へと溶け消えてゆく。これで返事でもあればますます怪談なんだけど、そんな展開はないらしい。

もちろん、その暗がりの奥から猟銃を構えた黒服の大男がやってくるなんてこともなく。

「お邪魔します」

丁寧に頭を下げるメリーも後に続いて、とりあえず家の中の様子を見て回ることにした。

リビングの中は一層暗く、思わず手が照明のスイッチを探るが――壁に見つかったボタンに触れても、天井の明りが灯ることはなかった。

当たり前だ。もうこの家に電気は来ていない。苦笑いしつつ、荷物の中からマグライトを取り出して灯りをつける。乳白色の明かりの下、白い布を被せたソファ―とテーブル、暖炉にクローゼットという間取りが照らしだされた。

「……ふむ」

曾祖父が亡くなってからずっとほったらかしだという話だったから、足も踏めないくらい

に荒れている可能性も考えてはいたけれど、杞憂のようだった。

日に焼けた絨毯を踏みながら、そつと部屋を一周する。

「確か、水道はまだ通じてるはずなのよ。共同井戸だから。こんな山の中だし、非常用の発電機もあったんじゃないかな……」

シンクで蛇口から水が出るのを確認する。ダイニングキッチンも一応機能はしているらしい。一応飲み水は持つてきてはいるが、シャワーやトイレもきちんと使えるならそれに越したことはない。

「……？」

「どうかした？ メリー」

「？ なにか、聞こえたような気がするんだけど。気のせいかしら」

「ちよつと、やめてよ。今度はメリーの番？」

「そういうのじゃないと思うんだけどね……」

などと軽口をたたきながらも部屋を覗くたび、ふわりと鼻先をかすめる埃の匂いと共に、おぼろげだった幼い頃の記憶が少しずつ形を取り戻してゆく。

もっと背の小さかった頃、憧れと興味混じりで見上げていた本棚や家具。ひいお祖父ちゃんの家には、私の知らない不思議を詰めこんだ本が、いつもぎつしりと満ちていた。いまは高くなった視線からそれを見て、胸の奥が小さく締め付けられる。





「蓮子？」

「ん。……なんでもない。ちよつと寂しくなっただけよ」

部屋の中はどれも、静謐さと静寂に満ちていた。

人の手が触れなくなった建物は、わずかな時間ですぐに朽ちるという。特段、住人が手入れをしていなくとも、住居とは本来、人がいてこそ成り立つものだ。

家がなければ人が長く生きていくことは難しいように、住人がいなくなれば、その役目を失った家もまた、長くはない。

けれど、ひいお祖父ちゃんの家なくなったこの家は、あの頃の記憶にあるまま、まるで時間が止まったみたいに形を残し続けていた。

まだ、自分の役目を終えてはいないのだと主張するように。

「夕ご飯、どうする？」

「そうね。さつき少し食べちゃったし、もうちよつと遅くてもいいかも」

「じゃあ先に寝室の方の確認と片付けしちやおうか。暗くなる前に」

記憶を頼りに階段を上って二階へと向かい、かつての寝室に踏み入れる。カーテンを閉められてそのままにされていた寝室は、寝具もあるせいかな他の部屋よりもすこし埃っぽい。

灯りと共に部屋の中に入って、振り向いた先。寝室の中央には、瀟洒なレース付きの天蓋付きのダブルベッドが——ひとつ。

「……………」

「あらあら……」

メリーが頬を赤くして口を押さえる。

ベッドに仲良く並んだ枕二つを見て、否が応でも理解せざるを得なかった。

いや。いやいやいや。……なにこれ。なにこの熱々ぶり。どうということなの。

少なくとも私が生まれた頃までは、ひいお祖母ちゃんもひいお祖父ちゃんもここに一緒に住んでいたはずで、つまりそれは、その、……ふたりはここで一緒に寝るのが当然の生活だった、ということになる。

写真でしか見たことのない、着物がよく似合うひいお祖母ちゃんとこのダブルベッドが全く結びつかず、私は絶句しつつ顔を伏せてしまう。

「仲良かったのねえ。蓮子のひいお祖父様とひいお祖母様」

「……身内のこーゆうのは色々とアレな気分になるわね」

なぜかほっこりした表情のメリーさんを脇に押しやり、シーツを覆っていた布を外し、外で払ったり、持ち込んだ携帯クリーナーで絨毯の汚れをとったりすることおおよそ30分。

ほどなく荷物も解き終え、私達は今夜の寢床を確保することになったのだった。

……ダブルベッドで。

「平気よ蓮子、私は気にしないから♪」





「こつちが気にするのよっ!!」



夕飯は持ち込んだコンロで携帯食を温めて済ませることにした。水が使えたので固形スープと缶詰めも使えたのが僥倖だっただろう。汗を流すには少し冷たかったけれど、この季節ならそんなに不自由はなかった。

「静かね」

「ええ。電波もほとんど入らないし、もっぱらネット接続も有線なのよ。やっぱり天体観測にはそういうのが重要らしいわ」

圏外を示す複合体の外部端末をテーブルに放り、窓外一面に広がる夜の野山を見下ろす。もっと虫も居るのかと思っていたが、表で食事してもほとんど気にならないくらい。

交通や通信の不便さえ目をつぶれば、過ごしやすいところだったのは間違いない。

「さて」

おなかもちろち着き、旅の疲れを癒すために熱いシャワーでも浴びて軽くお酒でも——と行きたいところだが、残念ながらそうもいかない。ここに來た本題を忘れてしまつては意味がないのだ。



「じゃあ、本格的に探索と行きましようか」

日程の関係上、明日の午後にはここを出発しなければならない。調べ物は出来る限り今夜中にやっておきたかった。

……と、腕捲りして意気込んでみたものの。

お祖母ちゃんが東京に移る時に、大半の家具は処分か移動させてしまったため、残っているものなんてほとんどない。探すと言っても場所は曾祖父の遺品の残してある書斎と、私室がほぼすべてだった。

マグライトとランタンに照らされた書斎には古びた表紙の書籍がずらりと並び、ちよつとした図書館のよう。これでも重要なものは研究室や大学の手てを使って寄付したり配ったりしたそうなので、もとはどれだけ数があったのかわからない。よく見れば地面にも本の格好に絨毯の毛足が乱れ、日焼けの跡ができていたりしたので、往時は部屋いっぱい本が積み上げられていたのだろう。

「……さすがに、こっちは埃が凄いわね」

「蓮子、マスク使う？」

「ん。ありがと」

埃というよりは古書独特のあの匂い。紙魚が残した虫食い跡を避けつつ、メリーと二人、戸棚をあさり、ファイルを広げ、本のページを捲る。





曾祖父が残したものはほとんどが天文関係の書籍で、丁寧な付箋が付けられているものがほとんど。これだけ紙媒体が多いのは、時代や地域性を考慮しても、曾祖父の趣味もあったのだろうと思われた。

いすれにせよ、ひいお祖父ちゃんは私のように思いついたことを端からメモする類のズボラはしていなかったらしい。

「……どう？ 何かあった？」

「それっぽいのは見当たらないわね」

机の中や引き出しはほぼ整理されて空っぽであり、たまに蜘蛛が巣を作っていたり、ヤモリが潜んでいたという程度。当時の記録や書類などを探そうとした私達の探索はすぐに暗礁に乗り上げた。仕方なしに本棚の本の中を順番に改めることにしたのだが――

本棚から引き抜いて端から積み上げた本の中にも、特にそれらしいものは見つからない。

「随分几帳面な人だったのね、蓮子とは大違い。遺伝じゃなくて突然変異だったのねえ」

「うるさい。……むー。日記とか、メモとか、あると思ったんだけどなあ……」

とうとう最後の一冊になってしまった本を閉じ、ふうと天井を振り仰ぐ。

搜索を始めてはや3時間が過ぎていた。

本棚と机とクローゼット。わずかな望みを託して一階の部屋も含めてあちこち探し回ってはみたものの、結局、私達は書斎にも私室にも、ひいお祖父ちゃんの痕跡を見つけることは

出来なかった。

……まさかここに堂々と、遺産の配分表でもあるなんてことは考えていなかったけれど。なにか、私宛のメッセージのようなものがあるんじゃないかと、心のどこかでは考えていたのだ。それも甘い想像だったということだろうか。

「はあ。無駄足だったかしら」

「さんざんねえ、秘密組織にまで追いかけられたのに」

「それはもういいじゃないの……」

ぼやいて背中を本棚にもたせかかる。埃で汚れた頬を拭い、十時半を回ろうとする時刻に吐息——と。

何気なく見上げた頭の上、本棚の隙間に押し込められた、小さな異物が覗いているのが視界に入る。

「あつた……!!」

慌てて一階に駆け降りて、脚立を抱えて再度二階へ。メリーに支えてもらった脚立の上、背伸びして本棚の上に伸ばした手の先に、埃を被った小さな箱が触れた。

こっそりと本棚の上に押し込まれていた箱の埃を払い、慎重に書斎の机の上へ。

「これが？」

「わからないけど、ね」





目当てのものだった時のための緊張半分、やっぱり外れだった時のための失望半分で箱を開ければ、そこには随分と古い日付の国際郵便が何通かと、

「写真？」

色褪せて古びた封筒から、ばらばらと四つ切の写真が零れおちる。

そこに映っていたものを見て、私は息を呑んだ。

フレームの奥、随分と若い——恐らくまだ二十代だろうと思われる、くたびれた背広姿の男性。おそらく曾祖父だろう。どことなく母にも似ていたし、眼鏡がそっくりそのままだ。

問題は、一緒に写っていたもう一人の方。

若き日の曾祖父の隣で緊張に表情を強張らせる、ブレザー姿の少女。

——その頭には、白くて長い、兎の耳が生えていた。

「……ねえ蓮子、これ……!!」

メリーの声も緊張のためか、硬い。

「私達、凄いものを見ちゃったんじゃないかしら」

「そうね……」

思わずごくりと喉を動かし、何度も瞬きの奥に写真を焼き付ける。

「蓮子のひいお祖父様、浮気してたのね……!!」

「そっちかい!!」

思わず綺麗な平手突つ込みを返してしまった。

「だってほら見て蓮子。この親しげな様子、そうとしか見えないわよ!」

「そうじゃないでしょ!? いやそうだけど!! でもこの場合そうじゃなくて!!」

「……あ、蓮子、これ裏に日付あるわよ。197×年——」

「いやもうそっちはいいから!!」

「ああん」

思わず計算しそうになった頭を修正しつつ、メリーから写真を取り上げる。

メリーの指摘通り、写真に映る曾祖父は、精々が三十歳になるかどうかというところ。写真の日付は不鮮明で、いつのことかは正確には分からない。たぶん、お祖母ちゃんと結婚する前後だから——いや違う、確か二人は幼馴染みで、小さい頃からずっと同じ学校に通っていたみたいな話も——

「じゃなくて!! これ、どう見てもあのウサギさんでしょ!? メリーが言ってた、月から来たっていう!」

赤い瞳。何かの制服めいた格好のブレザーにブラウス。およそ人にはまず見られない、夜明けの瞬間の空のような、透けるような銀色の髪。そして、何故かしわくちやで、ボタンの





ようなもので留められている長い耳。

人に似た姿こそしていたけど、彼女のそれは変装だとかコスプレだとか、そんなものでは説明できない存在感を持っていた。

フレームの中、硬い表情のウサギさんは、曾祖父との間に微妙な距離をとって並んでいる。

メリーの言うことはともかくとしても、ただの知り合いというには意味深過ぎる雰囲気だった。

「うーん。でもねえ、似た格好してるけど、同じ子じゃないわ。髪の色も、背の高さも違うみたいだし」

メリーが夢の中の廃駅で話したというウサギさんは黒髪をボブカットにしている、メリーと並んで座っても分かるくらいに背も低かったらしい。

写真に写っているウサギさんもやっぱり女の子ではあったけれど、背の高かった曾祖父との対比からしても、私達と似たくらいの身長はあるようだった。陽に透ける銀髪も、腰くらいまであるように見える。

「じゃあ、ひよつとしたら、その子が話してた寂しがりの仲間っていうのが……」

「この子、なのかもね」

メリーも同じことを考えていたらしい。順に写真をめくっていくと、フレームの中で、彼女はどこか周りを気遣うような、申し訳なさそうな、おどおどとした表情を覗かせているば

かりなのが気になった。よく見れば手足には少し痛々しい包帯や絆創膏の跡もあって、彼女が訳りなことは容易に想像がつく。

他の数枚には、外国の人やもつと若い——学生だろうか？ 男女達に混じって、彼女が映っているものがあつた。

ここまでくれば、認めざるを得ない。

「そつか。……ひいお祖父ちゃん、月のウサギさんと逢つてたのね」

驚きもちろんあつたけれど。心のどこかでは、やつぱり、という思いが強かつた。

……口に出すことは、躊躇われはしたけれど。

ずっと昔、私が小さな頃から。曾祖父は、幻想の存在が実在することに、半ば確信を持っていたのではないかと思えてならなかつたのだ。

「まだ写真、あるみたいね」

メリーに促されて、封筒の中身を見てゆく。ほとんどはこの家の周りの自然風景や星を撮つた素人の風景写真だつたけれど、たまに他の人が映っているものがあつた。大学のキャンパスらしき場所で若い学生に講義をしているものや、海外の研究会か何かだろうか、大勢の人たちに囲まれた曾祖父が、にこやかに庭でバーベキューをしているものもあつた。

ひよつとしたら、ひいお祖父ちゃんのお葬式で見た人たちの中にも、この人達が居たのかもしれない。





ウサギさんをフレームにおさめた写真は全部で5枚。ざっと見るに、全部夏と思しき青々とした緑が映り込んでいる。

「そんなに長い時間、一緒に居た感じじゃないわね」

「そうね、これなら過ちが起きた可能性も低いかしら」

「なんでもその方向に持ってこうとするのやめてくれないかしら、メリー」

ジト目で釘をさすも、メリーは意外そうに眉を潜め、

「蓮子は気にならないの？ ひよっとしたら、蓮子も月のウサギさんの血を引いてるのかもしれないのよ!？」

……さらっと何が無茶苦茶な事をおっしゃってくれやがりますかこの娘さんは。

深く追求するとなんか洒落にならないような気がしたので、メリーの妄言は聞き流すことにしておく。

「ほら、うさみみなんて名字だし」

「人が前向きに忘れようとしてるのに容赦ないわね!! つか代々その苗字なんだけどね

我が家の人間は!!」

「いいじゃない、可愛いじゃないウサギさん!」

「そういう問題じゃないでしょ!？」

実にしようもない言い合いでどっと疲れ、肩を上下させながら写真に視線を戻す。



最後の一枚は、夜空の下に立つウサギさんの背中を捉えたものだった。

「……これ……」

数年に一度のブルー・ムーン。夜空には大きな満月が輝くその下で。彼女は精一杯、両の耳を伸ばし、電波の届かない寂れた山間から、怯えながらも必死になって月を窺っている。過去を切り取った写真の中で、まるで彼女は月を見上げて泣いているかのようにも見えた。

その子は寂しがりやで、臆病だった。

だから戦争が始まる前に、仲間を放り出して月を逃げ出した――

メリーのしてくれた夢の話の思い出し、思わず口を噤んでしまう。大きな月の浮かぶ空の下で、小さなその背中が、まるで重責に押し潰されんばかり。

そっと写真を置き、他の封筒に手を伸ばした。

「……………」

英文の住所を眺め、宛先を確認する。封筒の中身は、どうも曾祖父があちこちの友人とやり取りをした手紙らしい。かなりの数のあるその内容は、消印や切手から、世界中に向けて送られたものであるようだった。

その内容はひとつ。





ある日、突然曾祖父の家に転がり込んできたという、月のウサギさんについての話。信じられないことに、彼女は人類の侵略によって故郷を脅かされ、ここに逃げのびてきたのだという。傷だらけで疲れ果て、左右の耳を押さえて苦しむ彼女を家に迎え、その話を聞いてから、ひいお祖父ちゃんはある呼びかけを始める。

——どうだろう、諸君。

ここはひとつ、この寂しがり屋の月のウサギの故郷を守るために、僕らで月を買い占めてやろうじゃないか。

人間たちが無残に踏み荒らし、やがては残らず砕かれて地上へと持ち去られてしまうのだという彼女の故郷を。

月のウサギたちが住んでいるという、月の裏側にある土地を。

皆でありつたけ買い占めてしまおうという、壮大で、馬鹿げた、およそ科学の徒とは思えない、幻想的で荒唐無稽な企画。

ひいお祖父ちゃんはそのを、世界中に向けて、真顔で訴えていたのだ。

「……月の裏って、文字通りの意味じゃないと思うけどなあ」

苦笑とともに、そんな言葉が口をついていた。







▼
ベランダから身を乗り出せば満天の星空の下で。

しばらく手入れもされていなかったにもかかわらず、木造りのデッキは軋むことなく引つ張り出したチェアを支えている。青い炎をともしコンロの上、ポットがかたかたと小さく蓋を鳴らしていた。

手摺に頬杖をついていた私を、背中からメリーの声が呼ぶ。

「蓮子、珈琲淹れてみたけど、飲む？」

「……ん。そうね」

現れたメリーから、熱いカップを受け取った。

火傷しそうに熱い黒褐色の液体をそっと口に含めば、心地よい香りと程好い苦み。ぼんやりとしていた頭を覚ますカフェインの味。

珈琲の味を堪能しながら、傍らの白い天体望遠鏡を見上げる。

ひいお祖父ちゃん部の部屋の隅で埃を被っていたそれは、今から見ればもう骨董品と言つていいくらいに古いものだ。衛星とリンクするでもなく、ネットに接続されているわけでもない旧式。



別れの挨拶もなく『彼女』が居なくなつた後も、ひいお祖父ちゃんはずっと、このレンズの向こうに月を見上げていたんだろう。

「蓮子のひいお祖父様は、月の幻想を守るためにあんなことをしてたのね」

「そうね……いやはや、壮大だわ」

箱の中に納められていた手紙やメールの写しから、以後の経過も、断片的にだけけれど調べることができた。

月のウサギの故郷を守ろう――

初めは出来の悪いジョークと受け取られていた宇佐見教授のメッセージは、まるで空の彼方に話し相手を探すように、何年も時間をかけて少しずつ広がっていった。

十年が過ぎ、二十年が過ぎて――いつしか、曾祖父の企画には、多くの賛同者が集まった。名乗り出た人達の中には、アマチュアの天体観測グループから、私でも知っている有名な天文台の名前まで上がっている。

その数は数百、数千にも及んでいた。

――人類が見上げ焦がれた天の月を、幻想のままに。

多くの共感を讀んだその声に押されるように、宇佐見教授とその仲間達は、月の裏側、南



極にあるエイトケン盆地に総計8000万エーカーもの広大な土地を買い占めた。

彼等はさらに数年をかけて法務局や弁護士の元を奔走し、ただのジョーク商品でしかなかった月の土地の権利書を、少なくとも公的な取引において無視できないような、正式な契約へと昇華させる。

私の元に至る50万エーカーの月の土地は、こうした企画の一端だった。

「酷い話よ。こんな悪戯に、世界中を巻き込んでさ」

少なくとも、曾祖父のしたことは、科学者として褒められることではないだろう。真実を解き明かし、謎を解明する科学者とはまるで正反対のスタンス。

著書のいくつかはこの活動のために発刊されることになり、研究者の間では科学者としての評価に傷を付けた、という批評もあった。

いわく、『月を買わせた男』。宇佐見景一教授にはそんな渾名も付けられ、一時はイグ・ノーベル章の候補に挙がったこともあったという。

……けれど。

「……………」

カップを傍らにどけて、望遠鏡のレンズの中をそっと覗きこむ。

38万4000キロの彼方、空に浮かぶ月の表面は、白い大地と、黒く広がる広大な海。

いくつもの凹凸を刻む山脈。清浄にして瑕疵なき空の珠。



——あの月には何があるんだろう？

それは恐らく、人類が空を見上げて最初に抱いた疑問だったのだろうと思う。

岩塊と砂の散らばる荒野の大地か、穢れを知らぬ天上人たちの住む樂園か。それを確かめるには、どんなに大きな望遠鏡を作っても足りなかった。

そんな時代に、人々が月に見つけたものは、きつと千差万別で。

蟹、ロバ、犬、ワニ、獅子。

水を汲む少女、本を読む老婆、薪をかつぐ青年。

そんないくつもの幻想の中で、あの空に浮かぶ神秘の珠に、きつと誰かが願ったのだ。

月にはウサギがいるのだと、きつと誰かが願ったのだ

なんのことはない。光ですら一秒も遅れて届く距離に隔てられて、レンズの向こうにも映らない月の大地に恋焦がれていたのは、人間だって同じだったのだ。



何かの夢を、見ていた気分だった。





「……？」

ぎしりと軋むベッドの上、ふわふわの毛布の中に包まれてもぞりと寝返りを打つ。暦はまだ夏のほうが近いけれど、郊外ということもあってか、夜になればそれなりの寒さがあつた。

ぼんやりした頭、ぼやけた視界を埋めるのはレースの天蓋。ふかふかの感触はまるで雲のように身体を抱きとめて私を微睡みの奥へと誘う。……恐ろしきかな、宇佐見をダメにするダブルベッド。

視線の隅、隣でベッドの上に身を起こしたメリーの気配。なにかあつたのかと張り付く瞼を擦れば、

「お手洗い……」

メリーはぐしぐしと顔を擦りながら、ベッドを這い出し、ぺたぺた廊下へ歩いてゆく。

なんだと安堵して大欠伸。カーテンの隙間はまだ真つ暗。毛布を肩まで引き上げ、微睡みの中にもう一度身を委ねる。
そして。

――。

眠ったか、眠らないかの夢うつつの狭間に、小さくなにかが囁く声を聞いた。



急速に意識が覚醒する。ぱちりと開いた視界の先には、さっきまでと代わり映えしない寝室の光景。

最初に気になったのは傍らの寒さだった。

「……メリー？」

改めて見やれば、ベッドの隣、メリーの枕は空っぽのままだ。捲られた毛布もそのままに、シーツはすっかり冷えている。部屋の中を見回すも求める姿は無く、静寂を埋めるのは窓の外の虫の声。

枕元で充電中の複合体に手を伸ばす。時計アプリの文字盤の表示は、窓の外の星空と同じ午前3時24分48秒、……49秒、50秒。

「……………」

ひやりと、首の後ろを冷たい指が撫でるような錯覚があった。ついさっき、眠りに落ちる直前にぼんやり眺めた星空は、まだ3時前を示していたはずだ。

メリーが階下のトイレに向かってから、30分以上が過ぎている。

「ねえ、ちよっと、メリー？ いないの？」

心持ち声を大きくして。廊下まで聞こえるように叫んだつもりだが、返事はない。

ベッドを抜け出し、ドアの横まで近づいて壁のスイッチに触れる——無論、なにも反応しない。当たり前だ。電気は来ていないのだから。





焦りと共に思わず舌打ち。お行儀が悪いなんて言ってる暇はなかった。テーブルの上のマグライトを掴み、廊下へと飛び出す。

携帯照明の冷たい灯りの中に無人の廊下が照らし出される。

突き当りの階段は、踊り場でぐるりと折り返して階下へ続いていた。

埃をかぶった家具の陰に、ぽかりと口を開けた廊下の奥に、束ねられたカーテンの裏側に。

頼りない灯りでは拭いきれない深い闇がわだかまっている。

「メリー……？」

再度、相棒に呼び掛けた声が廊下の奥で不気味に反響する。まるで自分の声じゃないみたいだ。私の気付かないうちに、自分を除いた何もかもが、この暗闇の奥に飲み込まれてしまったんじゃないか——そんな馬鹿げた想像までもが頭をもたげる。

（……なにを考えてるのよ）

思わず、マグライトを握る手に力が籠る。手のひらに滲む汗を感じながら、私は階段へと踏み出した。人の手が遠のいていた段差がざしりとかすかな軋みを上げた。

ごくりと緊張を飲み込んで、一段一段を慎重に一階へと降りてゆく。深い夜の中へ、身体ごと沈んでいくかのよう。

「メリー？ どうしたの？ どこ？」

階段を降りきった私は、灯りを掲げてリビングを覗きこんだ。やはりメリーの姿はない。



「……………」

ここを抜けた突き当りがトイレのはずだ。踏み出す一步ごとに、ぼんやりとした灯りの境界が揺れる。床に落ちた光の輪の外側、見通せない暗がりの奥に、得体の知れないなが潜んでいるような想像が、手足を固く強張らせる。

ゆっくり踏み出した爪先が、柔らかなものを踏みつけ——ざらりとした感触に悲鳴をあげそうになる。何のことはない、ただのスリッパだ。落ち着け、慌てるな。

トイレの鍵は掛かっていなかった。当然、メリーの姿も見当たらない。まさか、どこかで酔いつぶれていたりするんじゃないかという、一縷の望みも大外れ。

じわじわと背筋を這い上る焦燥感に、鼓動が早まり、口の中が渴く。

「ねえ、どこ行っちゃったのよ……？」

思わず声を張り上げて、私は一階を走り回った。暗がりの中を細いマグライトの明りが揺れる。リビングにも、キッチンにも、クローゼットにもメリーの姿はない。

「——そうだ、鍵！」

もしかしたらと閃いて、玄関に駆け込みドアノブに手を伸ばす。がこんと返ってくる重い手ごたえ。鍵はかかったままだ。

誰かが侵入してきた形跡はない。そのことに一瞬安堵しかけ——そして更なる疑念が湧き起こった。この家の電子錠は機能していないし、鍵は私が持っている。





じゃあ、メリーは一体どこに行ったんだ!?

(……冗談、止してよ)

努めて、頭の中から追い出そうとしていた恐怖が、胸の奥に湧き起こる。

脳裏をよぎる不気味な黒服達の姿。インクの染みのように、記憶の中から染み出してきた連中の手のひらが、闇の奥からぬつと生えてくるような錯覚。

(まさか、そんな)

思い切り頭を振って嫌な想像を振り払った。そんなのはただの妄想、でたらめ、考えすぎ——のはずだ。メリーだつてそう言っていた。ヒロシゲの時も、研究室の時だつてそうだ。

単なる偶然。気のせい。見間違い。そうに決まってる。

黒服の男達——オカルトに近付き、秘密を暴こうとする者たちを消す政府機関の組織。

馬鹿馬鹿しい。そんなの、存在自体がオカルトだ。実際に居るはずなんてない。

(でも……っ)

でも、でも。けれど。私達はそんなオカルトの存在を知っている。常識の埒外に潜むべきもののたちの存在を知っている。

私とメリーはずっと、現実と幻想の隙間に満ちた境界を暴いて、その真実を確かめようとしてきた。

秘封倶楽部の活動は非合法なもので、政府機関に目を付けられていない保証なんてどこに



もない。もしも。私達が知らないまま、ポイント・オブ・ノーリターン 帰還不能点を通り過ぎてしまっていたのなら。

現実と幻想の境界を不用意に侵し、結界を暴く眼を持つメリーを、幻想に近づきすぎた私達を、人目に触れずに処分する機会があつたとしたら？

あいづらはそのために派遣され、私達を監視しながらすぐ傍に静かに身を潜めて、ずっとそのチャンスを待っていたのだとしたら？

「っ、返事してよ、ねえっ、メリー！」

いてもたってもいられず私は叫ぶ。脛が近くの椅子を蹴飛ばし、家具にぶつかって大きな音を立てた。激痛が響くが、そんなもの構ってられるもんか！

暗がりの中に一人取り残されて、応える相棒の声もなく、不安に押し潰されそうになりながら、私は喉から声を絞り出し――

「メリー「蓮子？」」

「わひやああああッ!?」

背中からの突然の声に飛びのき、仰け反った後頭部をしたたかに壁にぶつけて、私はその場に蹲る。目の裏にちかちかと光が瞬き、鼻の奥がつんと疼く。

「……………っ！」

白黒する視界に頭を振り、涙目になって見上げれば。

パジャマ姿のメリーがきよとした顔で立ちつくしていた。





「め、メリー、っ!？」

「どうしたの、そんな大声出して」

「いやそれ聞きたいのはこっちだ。」

「あ痛あ……っもう、どこ行つてたのよ!? 探したんだからね!」

「探した? なんで?」

こっちの気も知らないで不思議そうなメリーさん。あんまりにも暢気な顔をしているので、さすがに腹が立つてきた。

「なんでって、そんなの決まって——」

……そんなの、決まって。

口にしかけたところではたと我に返る。血の昇っていた頭が少しずつ冷えてくる。ようやくここに至って、どうやら自分が派手に空回りをしていたらしいことに気がついた。

猛烈な恥ずかしさがこみあげて、一気に顔が熱くなった。

「と、とにかく! 探したんだからね、心配させないでよね!」

「……?」

それを覚られないように顔を背け、ぶつけた後頭部を押さえながら、壁をバンバンと叩いて必死に抗議。しかし当のメリーさん、何がいけないのか全く分かっていない様子で疑問符を浮かべるばかり。いや、それどころか。



「ねえ、それより蓮子、こっちに来て！ 面白いもの見つけたのよ！」
なんともきらきらした目で、私の手を取るのであった。



じつと静寂の中に耳をすませば、確かに聞こえる虫の羽音のような異音。時折、わずかな
かちりという音を交えて続くその音は、私達の寝ていた寝室の斜め向かい、曾祖父の書斎か
ら聞こえてきていた。

「たぶんこの裏よ。ほら、その隙間」

「……？」

メリーに言われるまま、背伸びして蔵書を抜き取られたスチール書架の一角を覗き込む。
羽音はわずかに強くなり、その奥で薄闇の奥に明滅する緑とオレンジの光が見えた。

なにかの機械の駆動音と動作確認のランプだろうか？ そう思っ、つて、妙だと気付くのに数
秒。そうだ。妙だ。おかしい。

この家にはいま電気が来ていないはずなのに！

「なにこれ!？」

「でしょ。蓮子、ちよつと手伝つて。今回は私だけにやらせるのはナシよ」





一も二もない。早速二人がかりで本棚の本をすべて抜き取り、重い書架を苦勞して脇へと動かしだした。

隠し扉めいた構造の書架の後ろには、ぽかりと開いた空間があった。部屋のかげみに沿うようにできたわずかに2畳ほどのスペースに、低い唸り声をあげる筐体と、明滅する光が並んでいる。

旧世代型の設置型サーバー……それも、ネットスフィアに外部とのアクセスを持たないに反応しない独立構造のシステムである。

「これだったのよ、なんだか寝付けないと思ってたんだけど」

夜も更け、ベッドに横になったはいいものの、メリーはなぜか寝付けずにいた。軽く微睡んでもどうにも眠りが浅く、うとうとしては何度も目を覚まし——ベッドを出たのが午前3時前。最初に私が気付いた時だ。

用を済ませ、しばらく家の中を探検してから二階に戻ってきたメリーは、寝室に戻ろうとしたところでこの異音に気付く、それが書斎の奥から発せられているのを突き止めたのだという。

「……動いてる、みたいね。どこから電気が来てるんだかわからないけど」

紙の書籍に埋め尽くされた、レトロな書斎には不似合いな設置型パソコン。こんなものの存在を私は知らない。曾祖父が研究に使っていた機材の大半は、この家を引き払う時に全部処



分されているはずだ。それでも動力がないのだから、電源は全部落とされていなければならぬ。

だが――動いている。型番から見るともう15年も昔の年代物のトロンが、いまでも現役で稼働し、なにかの処理を行っている。

「……これね」

サーバ横のスツールには年代物の物理キーボードが備えられていた。おそろおそろ手を伸ばし、埃を払って表面に触れると、機器の明滅が激しさを増し、サーバの唸り声が強くなる。

長い時間をかけて機械に火が入り、システムはサスペンドから起動。

突然、周囲がぱあっと明るくなった。驚いて顔を上げれば、壁際の物理モニタが明滅を始め、ゆっくりとOSの起動ロゴが表示される。

「……………」

私とメリー、息を飲んで見守る深夜三時の夜闇の中、物理モニタの一面に、骨董品店で見えないようなデスクトップアイコン式のホームスクリーンが展開された。

立ち上がったウィンドウは、黒地に白の簡素な表示で、起動を知らせるシステムメッセージが並んでいく。文字の奔流が画面を埋め尽くすと、その最後に点滅するカーソルが浮かび上がった。パスワードの入力を求める古典的なセキュリティである。

「……メリー、待ってて！　すぐ戻るわ！」





寝室へ駆け戻り、曾祖父の日記帳を掴んで舞い戻る。驚掴みでめくったページの中から、震える指で覚えのある文字列を打鍵した。

——OK、認証成功。

「動いたわ」

AR非対応の機器なんて何年ぶりに触っただろう。埃まみれのキーボードで汚れる指先を気にしている間もなく、画面が切り替わる。何枚かのシステムウインドウが開閉して、外部との接続が確立された。ネットスフィア経由ではない、恐らくは直接の衛星通信。

画面中央に浮かび上がるのは、実に古典的なチャットウインドウが一枚。恐らく、京都育ちのメリーなんかは見たこともないだろう。装飾もユーザインターフェースも大変に素っ気ない、文字だけで情報をやり取りするツール。今は博物館に並んでいるのが相応しいくらいのシステムだ。

私のログインを示すシステムメッセージが表示されるとともに、画面には『KK』のアイコンが翻った。

直後。画面にべつの文字列が表示される。

>>Strong

...?? Who are you ?



「蓮子、これ」

メリーが固い声音で囁いた。そうだ。これはチャットツール。他の誰かと交信をするためのものだ。繋がった先には通信相手がいる。

>>Strong

おい、一体どうなってる？ 本当に景一なのか？ いつ帰って来たんだ！？

こくりと硬い唾を飲み込んで、メリーとアイコンタクト。私は慣れない物理キーボードを叩き、返信のメッセージを送る。

AKK1

こちら宇佐見天文台。私は宇佐見蓮子。景一のひ孫です。

自動翻訳なんて気の利いたシステムはついていないらしかった。白い画面に明滅するカーソルをじっと見つめながら、息を飲んで待つことしばし。

動揺するように数度震えたカーソルが、爆発したように激しく蠢く。

同時、画面に猛烈な勢いで文字が奔った。





>>Strong
驚いた！　なんてことだ！　おい、みんな起きろ！　一大事だぞ！

月のウサギたちの帰還を支援する、チャンネル#CAVOR。

15年の時を経て、そこに帰還した開設者『K1』のログインに、ウィンドウは時ならぬ喧騒に湧き立った。





**>>Strong**

そうか、レンコ。君がああの時の。……覚えてるかな、景一の葬儀には私も参列していたんだ。いまはもうハイスクールかい？

>>K1

大学生です。十一歳入学組ですから。

>>Strong

それは大したもんだ。景一も良いひ孫を持ったな。

月のウサギ達の帰郷を支援する有志の会——チャンネル#CAVORの面々は、揃って言葉の限りを尽くし、私——『K1』の来訪を歓迎してくれた。中でもチャンネルの現管理人、ジョージ・ストロング氏の喜びと驚きようと言ったらひとしおである。

ストロング氏は生前の曾祖父とも面識があり、このチャンネルの開設にあたって、『月を買



わせた男』の無茶な注文に奔走した一人であるという。当時、法律関係の事務手続きに尽力してくれたケーメンズ氏と一緒に、いまはこのチャンネルの最古参メンバーだった。

>>Kamens

参ったな、今日は大盛況じゃないか。こんな時間、普段は誰も見てやしないつてのに。

>>Strong

ケーメンズ、君だって前回のログインは去年のクリスマスだろう。そら見ろ、エンテンザまでやって来ちまったじゃないか。

>>ENTZ

ご挨拶だな、ご老体。こっちはシドニーでせつかく一仕事終えて休んでいたところを叩き起こされたんだぞ。

>>LUX

ようこそ、チャンネル・ケイヴァーへ。はじめまして、ミス宇佐見。ばくはレスリー。こうしてお会いできて光栄です。





♪Ferguson

おいおい、ルクロア。気をつけておくれよ。NASAのパイロットは女性に手を出すのまでこつも手早いのかね。

♪LUX

心外だなあ！ 宇佐見教授の曾孫さんに失礼な真似はしませんよ。

♪Rob

どうだかね。……ねえレンコ、気を許しちゃダメよ。彼の経歴を聞いたらきつとあなたもびっくりするわ。

♪LUX

やめてくれよコスター、君まで！

チャンネル開設者『K1』の曾孫と言葉を交わそうと、次々ログインしてくるメンバー達。チャンネルの参加人数はみるみる定員に達し、強制切断と再接続の椅子取りゲームがはじま

っていた。

プラグインの吐き出す感情拡張子に画面が埋め尽くされ、会話ログはあつという間に流れていってしまう。

「なんだかモテモテねえ、蓮子」

「参るわね。私がすごい訳じゃないのに」

私が知らない人達が、私のことを知っている。なんだか不思議な気分だった。

>>Strong

驚かせてしまつてすまない、レンコ。みんなとても興奮しているんだ。……まさかそのアカウントから□グインがあるとは思っていなかったからな。

月のウサギの故郷を守るため、月面の土地を買い占めるという計画——宇佐見景一教授の呼びかけに応えた有志一同は、協力してそれらを推し進める傍らで、地上のどこかに隠れ住む月のウサギたちに呼びかける試みを続けていた。

曾祖父の記録から、彼女達が大きな耳を使い、特定の波長を使って通信のようなものを行っている事実に行き当たった彼らは、大規模な分散コンピューティングによるその解析を決定。プロジェクト Caver@MoonRabit を開設して協力者を募る。



以来、メンバーは少しずつ変わりながらもその理念を受け継ぎ、解析した交信を組み込んだ通信を、ずっと月のウサギたちに向けて送り続けてきたのだ。各地にはそのための独立系のシステムが整備され、この曾祖父の家もそのための拠点の一つとして現役で稼働しているのだという。

>>Strong

しかし、恥ずかしながらいまのところは一方的なラブレターだ。彼女達からの返信は一度もない。

>>Kamens

年寄りの道楽というやつだな。なあに、ストロングも私も金と暇だけは喰るほどある。老後の無駄遣いにはちょうどいい。

このチャンネル#CAVORは、もともと彼らの交流・雑談用として立ち上げられたチャットだった。しかし人騒がせな教授に巻き込まれ、その酔狂に付き合っただけで50年。彼らはずっとその夢を追い続けている。



>>>LUX

つまり、合衆国政府は月の住人であるウサギたちの実在を確かに掴んでいるのさ！

これまでの研究成果だという通信ログや記録映像を次々に示し、熱っぽく語るチャンネルメンバーたち。

アポロ11号はヒューストンとの交信で、月に住む嫦娥というお姫様とその従者であるウサギに関する通話を行っているし、アポロ12号の宇宙飛行士ピート・コンラッドは、宇宙にPLAYBOYのヌードグラビアを持ち込んだ。

アポロパイロットの中には第39代合衆国大統領のジミー・カーターは、バカンス中に凶暴な「殺人ウサギ」に襲撃され、直後に月の土地資源の所有を否定する協定の批准を行わないうことを表明。アポロ計画を推し進めた第35代大統領、ケネディは謎めいた暗殺によって命を落としたことで有名だが、同じ大統領候補だった彼の弟達も、揃ってスキヤンダルや暗殺などで政治生命を断たれていた。これらの事件では、関与した人々が軒並み記憶の欠落や洗脳を主張している。

「……なるほど。オールドアダムの常連さん達と似た感じなのね」

「本物具合はこっちの方が段違いだね」

メリーと二人、思わず顔を見合わせて苦笑。確かめるまでもなく彼らの熱量は本物だ。





そして。そんな彼らが私のログインにここまで驚いたのは、曾祖父が最後に残した言葉が原因だったという話だった。

『予想外のところから連絡があった。確認にしばらく時間がかかるが、次はいいニュースを知らせることができるだろう』

けれど、そんな思わせぶりなセリフと共にチャンネルをログアウトした『K1』は、最後に二度と戻ってこなかった。一月二月の不在は覚悟していた彼等も、まったく音沙汰の無い宇佐見教授の動向に不安を抱いたストロング氏はあれこれと伝手を頼って確認を試み、日本で曾祖父が亡くなっていた事を知ったという。

それでも、彼らは諦めなかった。曾祖父の葬儀に参列し、その死を悼みながらも、なお。じつと辛抱強く『K1』の残したメッセージを信じ、いつか彼が驚くようなニュースを持って帰ってくる事を待ち続けていたのだ。

>>Strong

もしかしたら、景一と知り合った月のウサギが、ここに来てくれるんじゃないか。……そう期待するのを止められなかったのさ。このチャンネルの住人は、揃いも揃って、あの馬鹿げた計画に手を貸すような変人ばかりときている。



>>Ferguson

その変人筆頭のあなたに言われたくありませんよ、ミスタ・ストロング。

チャット越しに起こる感情拡張子の笑い声。なんだか故郷に帰って来たような気分で、賑やかなチャンネルの会話に興じていたその時だ。

傍らで画面を覗きこんでいたメリーが、急に顔色を変えた。

「ねえ、蓮子」

「どうしたの？」

「これ！　ここよ、よく見て！」

メリーが食い入るように見つめているのは、メンバーが面白がって見せてくれた受信塔が掴んだ通信記録。傍目にはただのノイズにしか見えないその受信部分を指差して、はつきりと言う。

「これ、境界よ」

「……見せて」

短く告げ、メリーの手のひらを目に押し当てる。

彼女の能力を使って共有した視界の中に、確かにそれは視えた。





一見してただの雑音、無意味なノイズの羅列を記しただけの記録。けれど、メリーの眼はその中にはつきりと、現実と幻想の境が記されているのを捉えていた。

残念ながら、その通信の内容までは分からない。メリーの眼が捕えることができるのは夢と現の境界まで。その向こうに何があるかを理解するには至らないのだ。この通信を直接メリーが受信することができれば、あるいはそれも可能かもしれないが。

でも。これは。これは、間違いない！

「大発見よ、メリー！ 愛してるわ！」

「ちよ、ちよつと、蓮子!? 危ないってば——」

感極まった私は声を上げてメリーに抱き付き——そのまま二人一緒にバランスを崩して、椅子ごと派手に地面に倒れ込んでいた。



新しくできたたんこぶを擦りながら、慎重に、自分達の眼のことについては言及をぼかして、自分達が結界技術に関する知識があるということだけを説明し、この通信になんらかの応答が記録されている可能性を告げると——にわかにチャネルは騒然となった。

驚愕、歓喜、疑念。チャネルメンバーの大半はなんてことだと驚いていたが、あまりに



も都合のいい展開を怪しむ声や、そもそも不審なログインの経緯を理由に、こちらの素性を疑う声も多く見られた。

そりゃあそうだろう。15年ぶりに接続した相手が偶然このタイミングでこんな事言い出したとして、怪しまれるのは仕方がない。

>>Rob

ねえ、ちょっと、みんなやめて。彼女を疑ったってしょうがないじゃない。せつかくここに来てくれた大切なゲストよ。

>>Ferguson

バカを言わないでくれ。素直に信じろというのか？ 結果技術は合衆国でも機密情報だ。まして我々には何も見えない。

>>VENTZ

そもそも、彼女達にはプロフェッサーの係累だという証明がない。ああ、プロフィール本人証明など示してもらわなくても結構。偽造方法はいくらでもある。悪いが私は反対だ。みすみす詐欺師の言いなりになるのは御免だよ。





>>dicK
もしかして、例の連中じゃないのか？ ルクローアがシアトルで追いかけたっていう奴ら。

>>LUX
彼女達が？ いや、それはちょっと信じられないけど……。

>>Ferguson
おいおい、いい加減にしてくれ。また例の黒服のバカ話か？ くだらない。今度はMIBかね、CIAかね、MJ12かね。言わせてもらうがね、そんな回りくどい方法で宇宙開発を妨害することに何のメリットがある。

>>LUX
待ってください、ばくが嘘をついてるって言うんですか！

>>Strong
みんな、ちょっと落ち着いてくれ。思っているところはあるだろうが、このさい彼女達の素性の追

及は後回しにしようじゃないか。ここでレンコを疑って追い返すのはとても簡単だ。……だが問題は、これが真実、唯一無二の最後のチャンスだった場合だろう。これからまた15年待たねばならないのは、この老体にはいささか辛いよ。

喧々囂々のウィンドウ。放っておけばいつまでも続きそうに思えた言い争いを静ませたのは、じつと黙っていたストロング氏だった。

>>Strong

レンコ。不快な思いをさせたかもしれないことを謝らせてくれ。みんな、真剣にチャネルの事を考えてくれているんだ。……だから、どうかひとつ、君の力を貸してはもらえないか。もしかしたら、君にならこれが何か分かるんじゃないかと思うんだ。

そうしてストロング氏は、チャットのデータ共領域を使って、いくつかのファイルを提示する。クリックと共に展開表示されるのは、3枚の写真。

デジタルデータで撮影されたそれらは、それぞれ別の夜景を映したものだ。フレームの中には室内や屋外と思しき風景と一緒に、星空が切り取られている。

ファイルの作成日は西暦2015年。撮影機材が拙いせいか画像データとしては不鮮明だ





が、ファイル容量はやけに重い。

AKK1

これは？

>>Strong

景一が我々に残した『宿題』さ。さつき、景一の最後のログインと言ったが、実は違う。その後一度だけ、そのアカウントがこのチャンネルにログインをしていた。その時残されていたのがこのファイルなんだ。

>>Kamens

ログイン日は5月7日。景一教授の葬儀の後のことだ。ログを遡ったが、どこからのアクセスかは辿りきれなかった。ゆえに今もってそれが誰だったのか、正体は不明だ。ファイルもしばらく気付かれずにいたため、オリジナルデータは既に削除されてしまった。それらはキヤッシュから復元したものになるんだが……。

そんなストロング氏の言葉は、私達の耳にはもう入っていなかった。



それどころじゃ、なかったのだ。

吸い込まれるように覗きこんだ3枚の写真。メリーはその中に、確かな境界の裂け目——これまでに見たこともない規模の異界との接続線を見出し。

私は、景色の一部に映る星空と月から、その3枚がありえないものを映している事をはっきりと理解していた。

データの作成日は2015年、ファイルが共有されたのだから10年以上前だ。ストロング氏は確かにそう言っている。

けれど、3枚の写真の撮影日は、いずれも今から先の未来だ。

「ねえ、蓮子、これ……」

「ええ、私にも視える。間違いないわ。絶対に勘違いじゃない」

お互いの顔を見合わせて、私たちはしっかりと頷き合った。

2015年に撮影された、未来の星空。これまでとは段違いのオーパーツ。

なぜ？ 誰が？ どうして？ どうやって？

胸に踊る無数の疑問の中、ただ一つ確実に言えるのは——

「これは、私達にしか解けない謎ってことよ」

まるで、挑戦状のように差し出された3枚の写真。曾祖父のアカウントを使ってこれを残した誰かさんは、間違いなく、私達の事を知っているのだ。





「……面白いじゃない。いいわ、受けて立つわよ！」

「なんだか、ずいぶん大騒ぎになりそうねえ」

言いながらも、メリーだって決して満更じゃない顔をしていた。それでこそわが相棒、秘封倶楽部の一員である。

期待に胸躍らせながら、複合体に写真データを複写してさらに精査する。

きちんと画像処理をかけて拡大すると、写真の1枚目の奥のほうにある水たまりに、満月の端っこが反射して映り込んでいるのを発見。

「よし！ 視えた！」

これで私は写真の撮影場所も特定することができた。

写真の向こう、乾いた大地に浮かぶ月と星は、今から半年後——2039年3月11日の、北米はグランドキャニオンの大地を指し示していた。







「はー……参ったわね。あんなに手続きで揉めるなんて」

「やっぱり手荷物で持ち込もうなんてのが無茶だったのよ」

「仕方ないじゃない。馬鹿正直に話したら国際問題なんだから」

ソファーに身を投げ出してぐったりと呻く。

手荷物検査で問題になったのは、私の荷物から見つかった正体不明の電子基盤であった。

ただでさえ警戒の強い国際線、すわテロリストかと疑われて一時は騒然となったが、結局違法性の無いものであると判断され、搭乗前に電源を遮断することで一件落着となった。

「これだけは、誰かに預けて出発ってわけにもいかないし」

肝心の本体は一足先に船便で海の上だが、そもそもこの基盤がなければともに動かないわけで、計画に大幅な問題が生じてしまう。

まあ、アメリカのグランドキャニオンで月面探査車を見つけたので、これから宇宙まで持つて行くんです——なんて、まさか言えるわけがない。

「玉兎号は嫦娥計画の失われた里程標よ。マイルストーンそれこそ大陸夏王朝の威信をかけて秘密工作員が奪還に來たっておかしくないわ。いまだってどこで見張られてるか」

声を潜めて告げる私に、メリーはそうねと呆れ顔。
空港の発着ロビーに、出発を告げるアナウンスが響く。

そう。私達は空港にいた。向かう先はモルディブ。現在世界で唯一稼働中の軌道エレベーター『天^{エド}と地^ダの結び目^{アンキ}』である。

「それにしても、ますます謎が深まるばかりね」

「本当にねえ……」

ひいお祖父ちゃんの残した『宿題』を追って、半信半疑でグランドキャニオンに飛んだ私達が遭遇したのは、月面と地上が繋がるという大異変だった。眼を疑う私達の前に出現したのは、何者かによつてリプログラミングされた嫦娥計画の月面探査車、玉兔号。

15年前に失われたはずの月の遺物は、月からのメッセージを携えていた。

……正確には、メッセージと思しき「何か」。

玉兔号と接触した私たちは、その通話記録の中に新たな境界の痕跡を見出した。メリーがチャンネル#CAVORの通信記録から見つけたものと同じ、私達には判読不能な、けれど確かに異郷との繋がりを示す言葉である。

これが月のウサギたちに対して送られたものであると推測した私達は、さっそく現地でストロング氏らと合流し、このメッセージをそのまま全世界に配信した。

私達には聞くことも読むこともできないその言葉が——果たして何を告げるものだったの



か。ちゃんと月のウサギたちに届いたのかどうか。私達にそれを知るすべはまだ、ない。

メリーもあれから一度も、夢の中で月のウサギと会ってはいないという。

「それで、残りの2枚、間違いないのよね？」

「信用しなさいって。私には裏にも表にもいろいろルートがあるんだから」

残る『宿題』、2枚の写真にはどちらも月が映っていなかったため、それらがどこで撮影されたのかは私にも分からなかった。けれど、映り込んだ窓の形状、その特異な星の配置についてあらゆるルートから総当たりを試みた結果、その星空がどこのものかを突き止めることができたのである。

2枚目の撮影場所は、いまから2週間後。これから向かう軌道エレベータ、エドウルアンキの先端にある宇宙ステーション。

そして3枚目は——なんと、衛星トリフネの内部からのものだった。

「見覚えがありますって言うのは簡単なんだけどねえ……どうやって説明したものかしら」
「この際正直に話しちゃうとか？」

「……実験動物にされたって知らないわよ」

いずれにせよ、宇佐見教授の『宿題』が真実、月と関わりある異変の手掛かりであったことが判明し、私達がそれを読み取れることが証明されたことから、秘封倶楽部はチャンネル#CAVOR 諸氏の支援を受け、2枚目写真の遭遇点であると目される軌道エレベータを昇るこ

とになったのである。

「ねえ、メリー。これが終わったら、なにかバイトでも探さない？」

「どうしたの、いきなり？」

「いまは無理でもさ、いつか行ってみたいじゃない、あそこまで」

遠く、遠く。どこかにいるはずの彼女達の声が聞こえるように。そっと、耳の上に両の手
のひらを添えて。私は空港のテラスの天井、全面ガラス張りの空の上を見上げる。

38万4000キロを隔て、人々の心を満たし、魅了してきた月。
空に浮かぶ、清浄にして穢れなき珠。

「……しようがないわね」

どこか、あきれた表情を覗かせながら。それでもメリーは小さく微笑んでくれた。
ああ、きつとそうだ。彼女となら二人、秘封倶楽部はきつとどこにだって行ける。

旧約酒場を後にして、むかうは月への第一歩。

私達は地上を離れ、ケイヴァリットの導きのままに宇宙を目指す。

「さて」

発着15分前を告げるアナウンスに、二人揃って席を立つ。吐息と共に伸びをひとつ。

「行きましようか、メリー。せっかくの宇宙、月まで行けないのは心残りだけど、秘封倶楽
部最大の冒険の始まりよ」





「ええ」

そう言えば、とメリーが首を傾げる。

「例の、蓮子があとを追いかけられたっていう黒服さん、見ないわね」

「……多分、どこかで会えるんじゃないかしら。海外の方が本場らしいし」

「会いたくないけど、できれば」

トランクを抱えて呻くメリーに、揃って私も苦笑する。まあしかし、私たちの旅路にトランブルはつきものだ。きつとまた何かが起こることだろう。

ぼやきながらトランクを引きずり、進むメリーを追いかけてようとして。

ふと視線を上げた発着ロビーの向こうに、まるでインクの染みのような、真つ黒な色彩を見つけたのはその時だった。

上から下まで黒一色、スーツに帽子の二人連れ。

見覚えのあるのっぽとちびの黒服が、遠く私達を見つめている。

「――、――」

静かに何事か口になると、二人はそのまま、帽子を取ってお辞儀した。

#read19 #004arc
橘色と浅黄色。帽子の下から飛び出した、白くて長い耳を露わにして。
敬礼をする二羽のウサギが、旅立つ私達を見送っている。

——私達は、夢と同じものでできている。

あの空に浮かぶ神秘の珠に、きつと誰かが願ったのだ。

月にはウサギがいるのだと、きつと誰かが願ったのだ。

今日の時刻と、私の居場所を告げる、満天に輝く夜空の彼方。

仰ぎ見た広大無辺の宇宙の中央には、今日も大きな月が、丸々と白い輝きを見せていた。



【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅折葉と申します。このたびはお手にとりいただきありがとうございます。

この本、『ケイヴアリストジャーニイ』は、月とその土地権利書を巡る秘封倶楽部二人の冒険を描いた、当サークル58冊目のSS本となります。

本作は今から6年前に京都の秘封オンリー「科学世紀のカフェテラス」第1回に頒布したお話のリメイク版にあたります。

月と秘封倶楽部について、そしてまたメリーの「境界」にまつわる眼の能力に依存しないテーマでの作品についてはこれまでも何度か書いてきたのですが、それらの総決算——として、当時できる限りのことを詰めこんだ本でした。

とはいえ、頒布当時はまだ秘封倶楽部も地球を飛び出してはならず（まさか一気に月を飛び越して衛星トリフネなんて場所が登場するとは）、現実の嫦娥計画もまだまた途上。月の都の侵略やイーグルラヴイの浄化作戦なんて影も形もなかった時代であり、ラストも今作とはだいぶ違っておりました。会場で初の完売となった思い入れのある作品であり、いつか幻想郷と月の新しい在り方を踏まえて書いてみたいと思います。

拙い部分は多々ありますが、少しでもお楽しみいただければ幸いです。



さて、今回の謝辞について。旧版、新版共に執筆にあたりましては、ホプレス氏、白衣氏、仁科氏には多大なるご助言を頂きました。

また、今回は表紙としてワイティ様に月のウサギたちの秘密通信の謎に挑む秘封倶楽部の素晴らしいイラストを描いていただきました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。





131 ケアヴァリットジャーニ





【奥付】

「ケイヴァリットジャーニー」

初版 平成29年3月26日

境界から視えた外界 -至-

オルハザカサンパンチ

発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは

著者: 銅 折葉 (@domioriha)

表紙: ワイテイ様 (@YT_) PixivID: 2746649

印刷所: (株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」
の二次創作です。



著：銅折葉／折葉坂三番地
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog>

表紙・題字：ワイテイ
<http://www.pixiv.net/member.php?id=2746649>

THE JADE RABBIT KEEPS POUNDING OUT ELIXERS AS AUTUMN TURNS TO SPRING,
AND HENG E BY HERSELF NESTS, WITH WHOM HAVING SYMPATHY ?



玉兔通信



2038年9月20日 ~ 2039年4月15日

Watch your back.
油断するな。

Shoot straight.
ためらわず撃て。

Conserve spell.
弾幕を切らすな。

And never ever cut a deal with a Dragon.
龍神には手を出すな。

